

市内遺跡

一千苅遺跡・小菅大聖院跡・大菅遺跡一



2003・3

長野県飯山市教育委員会

例　　言

- 1 本書は、平成 14 年度の国庫補助事業による「市内遺跡発掘調査」報告書です。
- 2 本書に掲載されている遺跡は次のとおりです。

千 竜 遺 跡 発掘調査	飯山市大字瑞穂字千竜 155-1 番地ほか
小 菅 大聖院跡 確認調査	飯山市大字瑞穂字内山 7053 番地ほか
大 菅 遺 跡 範囲確認調査	飯山市大字瑞穂字大菅 7400 番地ほか
- 3 調査は飯山市教育委員会が調査主体となり、下記の体制により実施しました。

事 業 者	飯山市長 小山 邦武（～平成 14 年 9 月 14 日）
	木内 正勝（平成 14 年 9 月 15 日～）
事業主体者	飯山市教育委員会教育長 清水 長雄
調査団長	高橋 桂（飯山市文化財保護審議会長）
調査担当	望月 静雄（飯山市教育委員会生涯学習課学芸員）
調査員	岡田 和幸・伊藤 彩美
作業参加者	岩井伸夫・真島基高・小林清和・市村文昌・真島今朝義・真島一男・蒲原良典・ 小林収高・吉原伝・山岸稔和・丸山重守・高橋喜久治・万場義秋・高橋武・宮本 鈴子・阿部智子・藤沢和枝・小林正子・滝沢恵実
事務局	市川 和夫（飯山市教育委員会教育次長） 米持 五郎（飯山市教育委員会生涯学習課長） 丸山 一男（飯山市教育委員会生涯学習課長補佐） 望月 静雄（飯山市教育委員会生涯学習課文化財係長） 山本伊都子（飯山市教育委員会生涯学習課文化財係） 出沢まどか（飯山市教育委員会生涯学習課文化財係）
- 4 本書の図版作成は藤沢和枝が中心となってとりまとめ、望月・出沢まどかが補佐しました。文責
は目次に掲載しました。
- 5 本書に使用した遺物写真は主に清水俊一（ミスズ堂）が撮影しました。
- 6 発掘資料・遺物は、飯山市埋蔵文化財センター（電話 0269-65-3993）に保管しています。
- 7 調査から報告書作成において次の諸氏・機関等からご指導をいただきました。記して感謝申し
上げます（順不同・敬称略）。

坂井秀称（文化庁主任文化財調査官）	笛本正治（信州大学人文学部教授）	学校法人文化学園 (大沼淳理事長)
小菅区（14 年度吉原年一区長）	小菅史跡調査研究委員会（蒲原良典会長）	小菅の里保護委員会（小林清和会長）

目 次

例言

目次

I	本書の概要	望月静雄	1
1	千苅遺跡		1
2	小菅大聖院跡		2
3	大菅遺跡		2
II	遺跡の位置と環境	望月静雄	4
1	遺跡の位置		4
2	歴史的環境		6
(1)	千苅遺跡の概要		6
(2)	旧石器時代から縄文時代草創期における周辺遺跡		6
(3)	小菅神社の周辺		11
(4)	大菅遺跡周辺		12
III	調査の記録	岡田良幸・望月静雄	15
1	千苅遺跡		15
(1)	調査方法		15
(2)	調査経緯		15
2	小菅大聖院跡		17
(1)	調査方法		17
(2)	調査経緯		17
3	大菅遺跡		19
(1)	調査方法		19
(2)	調査経緯		19
IV	千苅遺跡		21
1	遺構	岡田良幸・望月静雄	21
(1)	竪穴状遺構		22
(2)	土坑		23
2	遺物	望月静雄	24
(1)	旧石器時代～縄文時代草創期の石器		24
(2)	縄文時代の遺物		24
(3)	平安時代の遺物		25

V 小菅大聖院跡		27
1 遺構	岡田良幸・望月静雄	27
(1) 概要		27
(2) 遺構各節		29
2 遺物	望月静雄	31
(1) 食器類		31
(2) 中世珠洲陶器		34
(3) 錢貨		34
(4) 鉄製品		35
(5) 石製品		36
(6) その他の遺物		37
VI 大菅遺跡		38
1 遺構	岡田良幸	38
(1) A区		38
(2) B区		38
(3) C区		38
(4) D区		38
(5) E区		38
(6) F区		38
(7) G区		39
(8) H区		39
(9) I区		39
2 遺物	望月静雄	39
VII おわりに	望月静雄	41
図版		43

I 本書の概要

はじめに

本書は、平成14年（2002）度に実施した、長野県飯山市市内遺跡発掘調査等の報告書です。この調査は、国庫補助事業として飯山市が補助事業者となり、飯山市教育委員会が主体となって実施したものです。

調査を実施した遺跡は、次の三ヶ所です。

1 千刈遺跡（せんがりいせき）

個人住宅建設に伴う発掘調査です。建物建設によって破壊される前に、調査を実施して記録保存しようとするものです。

千刈遺跡は、旧石器時代から縄文時代草創期にかけての時期と考えられる尖頭器（石槍）がこれまでに多く発見されており、加えて細石刃石核（細かいカミソリのような小さな石器を作り出すための親石）も発見されるなど、飯山地方の当該時代を研究する上で最も重要な遺跡として知られています。

調査によって、尖頭器や削器（骨や木などを加工するための石器）・搔器（皮をなめしたりするための石器と考えられています）などが発見され大きな成果をあげましたが、堆積土が薄かったために当時の生活した面は破壊されていました。そのため、どのような生活の跡だったのか、出土した石器がすべて一時期のものであったかどうかは分かりません。

また、縄文時代の土器や石器も発見されましたが、同様に当時の生活した跡は破壊されており、土器や石器の発見によって約五千年前の人々が生活したことは間違いないところですが、その詳しい内容については明らかにできませんでした。

先人の暮らしぶりが少し垣間見ることができたのは、平安時代の生活の跡です。調査した地区の東北端から平安時代の堅穴住居址（地面を掘り下げて半地下式の家としたもの）状の跡が発見されました。当初は一般的な家の跡と考えていましたが、石組状の跡や鉄滓（鉄を製造する時に発生する鉄かす）などが発見されたことから、鍛冶に関係する施設あるいは鍛冶職人の兼用住居であったと考えています。のことから、おそらく一帯に平安時代の村があり、鍛冶を職業とする者もいたと推定されます。なお、鍛冶の存在は、村の中でも鎌などの鉄製品の需要が高かったことを示しています。



千刈遺跡近景

2 小菅大聖院跡 (こすげだいしょいんあと)

遺構が遺されているかどうか確かめるための調査です。

小菅地区にある大聖院跡は、昭和38年まで現存していた神職の邸宅です。建物の取り壊しの後、杉の植林や記念碑の建立などが行われ、当時の面影はなくなっていました。

大聖院は、中世や近世（江戸時代）には、小菅山大聖院として小菅奥社本殿や坊を統括する一大寺院として君臨していました。大聖院の歴史については、別に詳しく触れます。

今回は、中世から近世まで存在していた大聖院の建物の跡が残されているかどうか確かめるために調査を実施しました。その結果、表土をきれいに清掃した時点で最終段階（大聖院が取り壊される段階）の礎石や厨窓施設などが発見され、ほぼ当時のまま残されていることがわかりました。また、やや深く掘り下げ古い時代の様子を探ろうとしましたが、上部にある礎石等を残す意味から一部にとどまり明らかにすることはできませんでした。ただし、中世珠洲陶器片も出土していることから、確実に中世まさかのぼることが明確となりました。



小菅大聖院跡の発掘調査

3 大菅遺跡 (おおすげいせき)

瑞穂地区北竜湖の東岸から山地にかけての場所に、中世には大菅村があったとされ、過去には遺物も発見されています。明治の初期には地元住民にも知られていましたが、その後時間の経過とともに忘れ去られていきました。そのため、位置や範囲については不明確となりましたので、開発などに対応するためには範囲等明確にしておく必要があったため調査することとなりました。

一帯は私有地の杉林で、各所有者の同意をいただいて杉の根を痛めないように範囲を設定しながら調査を行ないました。北竜湖岸には北竜湖遺跡と呼称している縄文時代草創期から平安時代にいたるまでの遺物が多く発見されており、今回の調査でも湖岸に接した調査区では縄文時代や古墳時代の遺物が発見されています。しかしながら、大菅遺跡としての位置・範囲については、今回の調査でも明らかにすることができませんでした。

この大菅遺跡は、中世には小菅神域にも含まれていましたし、中世の戦乱の頃しばしば文献にも現れてくる地名もありますので、今後とも調査を続けたいと考えています。



大菅遺跡調査前の草刈作業



大菅遺跡（北竜湖対岸から）



大菅遺跡近景

II 遺跡の位置と環境

1 遺跡の位置

千苅・小菅大聖院・大菅の3遺跡とも、長野県飯山市大字瑞穂に位置する。旧下高井郡瑞穂村で、昭和29年の町村合併で飯山市となっている。

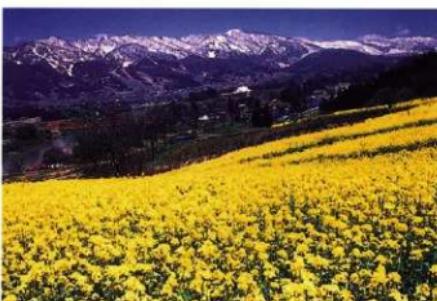
飯山市は長野県の北端に位置し、東西約6km、南北約15kmの紡錘形の小盆地を中心とした田園地帯である。盆地西縁は、黒岩山（938.6m）、銅倉山（1288.8m）等比較的低い関田山脈（東頸城丘陵）によって画されている。ここには越後に通ずるいくつかの峠道が知られている。一方、盆地東縁は毛無山（1649.8m）等三国山脈の支脈によって、また北竜湖等に見られるように断層構造線に沿って急峻な山地で画されている。

瑞穂地区は飯山盆地の東側に位置する。千曲川が盆地中央からやや東に向きを変え、東縁に近接する地点で樽川を合流し、宮中丘陵の西裾を北流しやがて信越国境の峡谷地帯に入る。瑞穂地区は、千曲川が樽川を合流する地点周辺から峡谷地帯に入る東側一帯で、南側は下高井郡木島平村、北側は下高井郡野沢温泉村に接している。

このうち、千苅遺跡は千曲川と樽川が合流する地点であり、宮中丘陵の南端にある。宮中丘陵は繩文後期の石棺状遺構23基が発見された宮中遺跡が所在するが、その丘陵の南端部の樽川に面した小範囲に千苅遺跡がある。

小菅大聖院跡は小菅地区にある。毛無山の中腹に位置し、集落のほぼ中央を断層線が横走する。集落は発達した扇状地上に立地し、西の盆地底に向けて広がりを見せる。集落東上方は、幅約750mの西に開いた馬蹄形の崩壊凹地が認められ、小菅神社奥社本殿もこの中に位置している。大聖院跡は、小菅集落の最も東上方の奥社参道入口南側にある。

大菅遺跡は毛無山の中腹、断層線に沿って形成された構造性の湖（飯山市誌自然編）である北竜湖東岸に位置する。字大菅は東岸の北から南端までを含む。標高は湖水線で約500mであり、盆地底との比高差は約200mを測る。北竜湖は現在灌漑用溜池として利用されており、かつては南側にあった早乙女池と北側の北竜池を併せて北

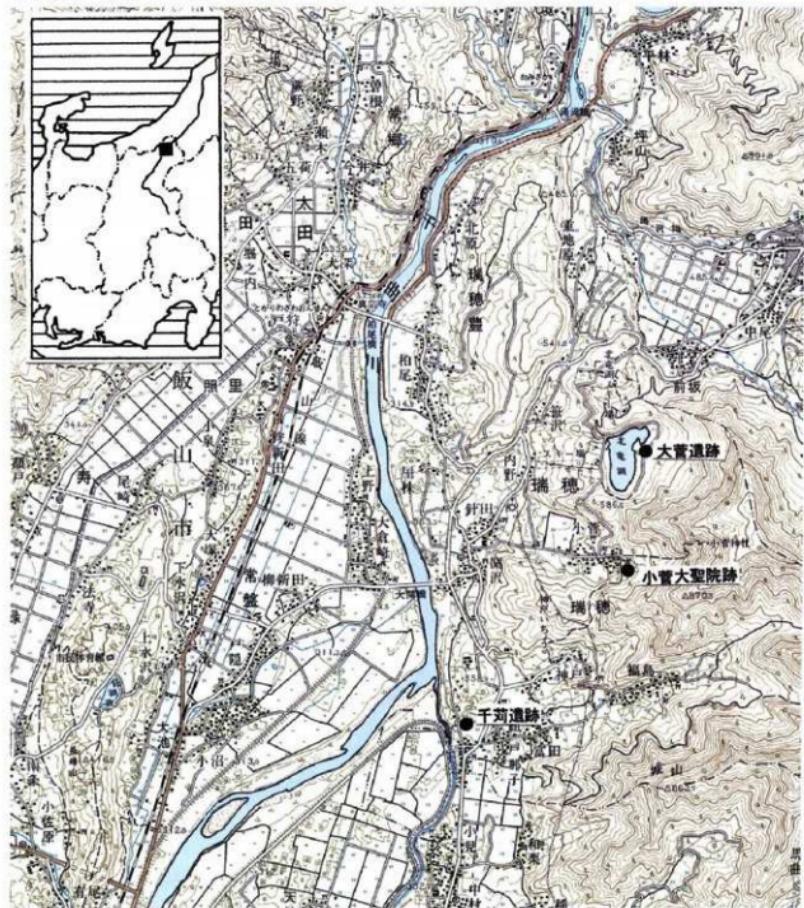


宮中丘陵から関田峰を望む



小菅大聖院跡（奥の建物は護摩堂）

竜湖としたという。そのため湖の周囲はかなり削土されている。また、特に湖の北半の周囲から旧石器～平安時代の遺物が多く採集されており、北竜湖遺跡として登録されている。大賀遺跡については、中世文書等に現れる地名であり、昭和初期までは文献等にも地名として登場していたが、その後徐々に忘れ去られ現在では中世に村があったこともほとんど忘れ去られようとしている。



遺跡の位置図 (1 : 50,000)

2 歴史的環境

3 遺跡に関わる歴史的環境については、千苅遺跡に関係することとして旧石器時代から縄文時代草創期における周辺遺跡、小菅大聖院・大菅に関わることとして中・近世の小菅修験について簡単に触れておきたい。

(1) 千苅遺跡の概要

千苅遺跡は、平安時代の土器が出土する遺跡として、既に信濃史料に記載されている（1956 信濃資料刊行会）。この遺跡が旧石器時代の石器も出土していることが注目されたのはずっと新しくなり、昭和40年代に入ってからである。高橋桂は、「飯山市の歴史と自然」の中で初めて旧石器時代の遺跡として紹介している（高橋桂 1974）。以下に引用しよう。「樽川が千曲川に合流する地点、宮中丘陵の南端に位置する。千苅在住の畔上光雄氏屋敷烟がそれである。時代的にはナイフブレイド、マイクロリス、ポイントの時期にわたっている。採集品のために出土層位は明確ではないが、ローム層中に含まれることは事実である。石器の種類は多種多様である。今後、詳細な研究を通して文化内容を極めると同時に大事に保存したいものである。市の貴重な遺跡の一つである。」

採集された石器及びその後飯山北高等学校地歴部部員によって新たに採集された資料は高橋桂にもたらされ、高橋から中島庄一に託されて資料が公開された（中島 1981）中島はその論文の中で、飯山地方の尖頭器を搬出する石器群の時間的な位置付けについて①小坂石器群→②関沢石器群→③細石器→④千苅遺跡→⑤横倉遺跡とし、千苅遺跡の細石器と尖頭器の同時性については、地域的な様相もあって一概に結論づけられないとされた。

また、長野県史においてもほぼ同様な見解が示され、「細石刃核と共に伴するかどうかの微妙な時期にある槍先形尖頭器を主体とする石器群である。」とされている（森嶋 1988）。

中島庄一は、その後「千苅遺跡の研究」（1990）において再度検証を行っている。その結果千苅遺跡群を、「縦長剥片剥離技術を伴わない御子柴・長者久保系石器群の（後半）段階」に相当するとされ、細石核についてはその前の段階において分離して考えることが「現段階では最も妥当な見解」であるとされた。

このように、千苅遺跡の石器群については、遺跡内の保存良好な地点の調査結果が明らかになるまで、簡単に解決できない問題を含んでいる。

(2) 旧石器時代から縄文時代草創期における周辺遺跡

千苅遺跡周辺の3km四方において、11遺跡の旧石器時代遺跡もしくは縄文時代草創期の石器群が発見されている（8・9ページ）。本稿ではこれらの遺跡について概観する。

城ノ前遺跡(2) 千刈遺跡の東方 500 m の段丘上に立地する。中組区の小林秀雄氏が丹念に採集したものである（8 ページ）。石器はすべて尖頭器で、組成は不明である。千刈遺跡の尖頭器と比較して、さらに平坦な加工を施し薄く仕上げている。

木原遺跡(3) 曾根川によって形成された扇状地状に立地しているが、詳細な地点は不明である。福島区の森山国士氏の採集・所有である（8 ページ）。1 点のみであるが、頁岩製の見事な尖頭状の削器である。

閑沢遺跡(5) 宮中丘陵の北側に接した段丘上に立地する。昭和 55 年に調査が行なわれ、尖頭器を主体とする良好な石器群が検出されている（飯山市教委 1981）。

瀬付遺跡(6) 千曲川に接した段丘上にあり、閑沢遺跡の対岸に位置する。信濃史料には写真とともにナイフ形石器の出土が記載されているが、資料は現在不明となっている。堤防の土取りによって主体部は破壊されたと考えられるが、周辺から剥片が現在でも少量採集することができる。

北竜湖遺跡(7) 標高 500 m の断層湖周縁にあり、盆地底との比高差は 200 m を測る。遺物は大半が北竜湖観光協会に保管され、一部市教育委員会が所蔵している。主体は繩文早期・前期の遺物であるが、旧石器時代の尖頭器・細石核及び繩文時代草創期の片刃石斧も採集されている。

太子林遺跡(8) 瑞穂グラウンドの周辺に位置する。昭和 55 年に発掘調査がなされ、ナイフ形石器・搔器・彫器・刃部磨製石斧等が発見された（飯山市教委 1981）。その後、農村集落週末処理場建設に伴い発掘調査がされた。発掘箇所が離れていることもあり太子林遺跡第 II 地点として報告したが（飯山市教委 1999）、その石器群の内容は異なっている。

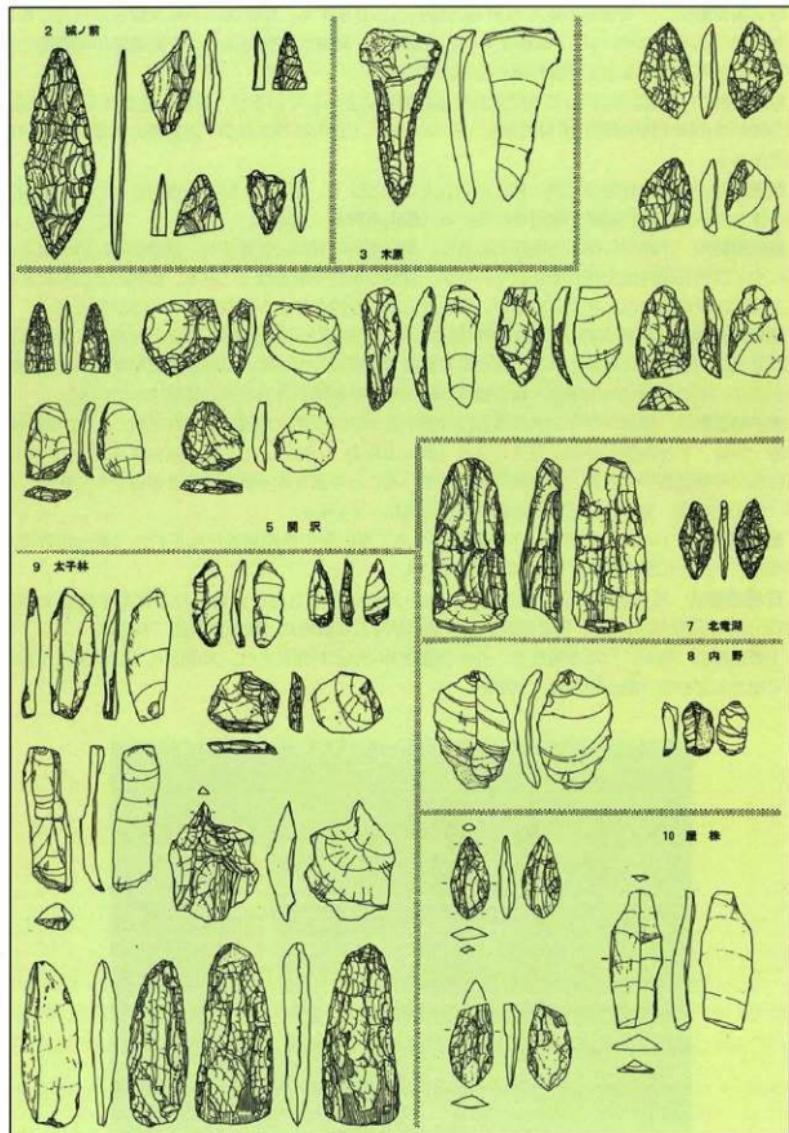
屋株遺跡(9) 1988 年、国道 117 号線バイパス工事に伴い発掘調査がなされた（飯山市教委 1989）。小形の尖頭器 2 点と剥片が出土している。

日焼遺跡(10) 屋株遺跡と同一原因により同年調査がなされた。6 箇所の遺物集中地点より約 2000 点の石器が発見され、特に黒曜石製の搔器が注目を集めた（飯山市教委 1989）。

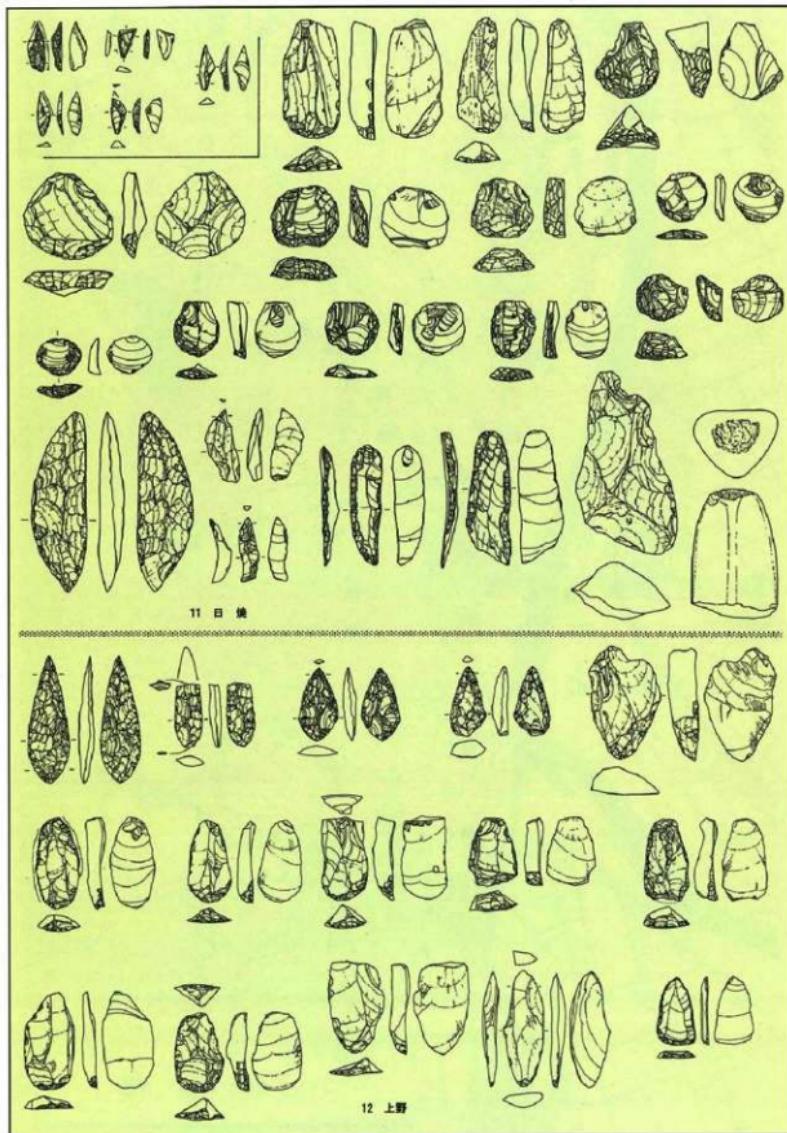
上野遺跡(11) 数回にわたる調査で、多くの遺物集中地点が発見され、尖頭器と玉髓製搔器が組成して出土している（飯山市教委 1989）。



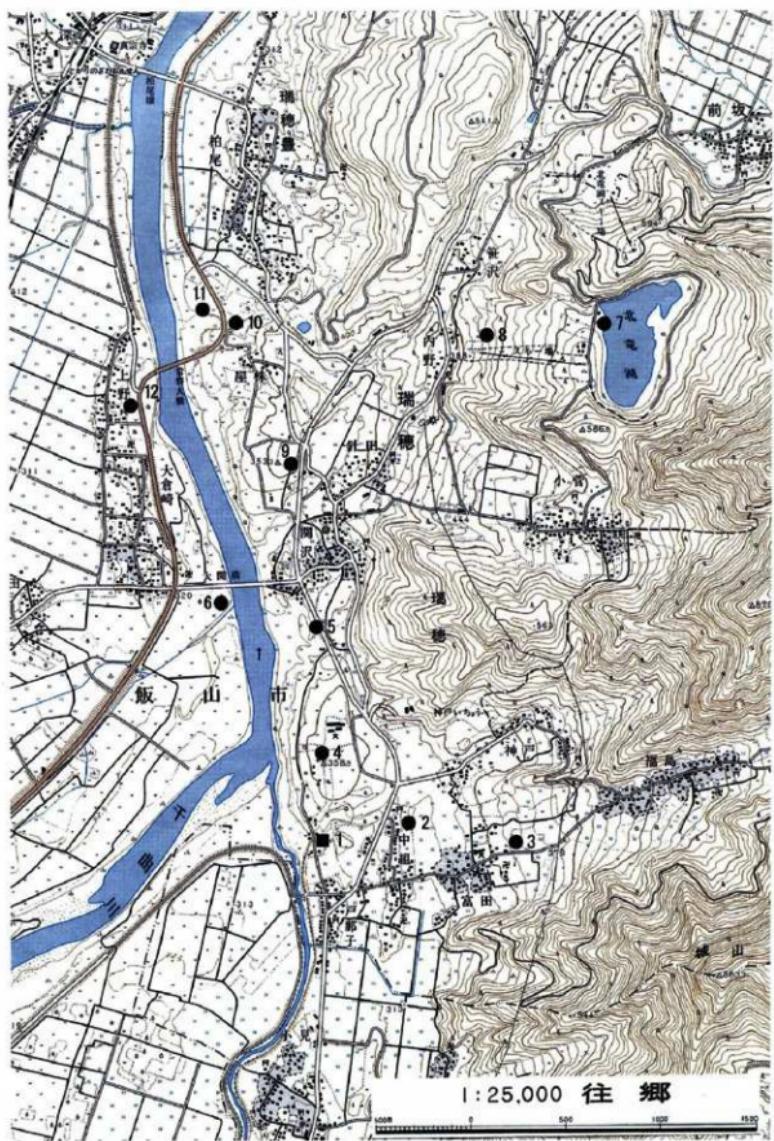
太子林遺跡の石器



周辺遺跡出土石器 1



周辺遺跡出土石器 2



千苅遺跡周辺の旧石器時代～縄文時代草創期における遺跡分布図

(3) 小菅神社の周辺

小菅山は戸隠・飯綱と並び北信三大靈場として知られており、「信濃国高井郡小菅山八所権現並に元隆寺来由記」などによるとその草創は白鳳8（680）年、修驗道の開祖役小角が小菅権現（馬頭観世音）をはじめとする、戸隠・熊野・金峰・白山・立山・山王・走湯の八所権現を祀ったことが始まりとされる。その後元隆寺を興し、金堂・講堂・舞台・三重塔・荒神堂・鐘楼・仁王門、さらには里社を建立したと伝えられる。

中世には小菅山元隆寺として、衆徒の僧房は上の院16坊、中の院10坊、下の院11坊とそれを総括する大聖院と末院10、盛時には僧侶、修驗者、衆人等300人を超し広壯優美を極めたという。応永13（1405）年に製作されたと考えられる板絵著色觀音三十三身図は、大塔合戦が終息、国内も安定し小菅の地も修驗道の最盛期を迎えた頃のものである。また、元隆寺來由記は天文11（1542）年に成り、奥社脇立は天文15（1546）年の製作で、奥社本殿の再建も天文年中になされており、甲越の戦いが始まる前のこの時期までが小菅山がもっとも平穡だった頃と考えられる。

甲越の戦い（川中島合戦）は、天文22（1553）年頃より始まった。弘治3（1557）年、長尾景虎（上杉謙信）が元隆寺に戦勝祈願の願文を奉納している。そして、もっとも激しく戦ったとされる第4回川中島合戦（永禄4年=1561）の余波により、小菅山は奥院を残し灰燼に帰したといふ。

時代が下り武田・織田氏が滅び、小菅荘が再び上杉景勝の所領となるに及び、天正19（1591）年に別当大聖院ならびに18坊が顧主となり、奥社本殿が修復されている。したがって、永禄4年以降この頃までに大聖院や多くの坊が再興されたと考えられる。宝物である寄進された鰐口（文禄2年 1593）はこの天正12年の奥社本殿の再興を祝したものと推定されている。

このように再興しつつあったが、慶長3（1598）年景勝の会津転封

により別当も移ったために頓挫してしまった。

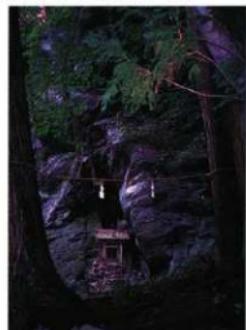
近世に入り、歴代城主の崇敬のもとに修理等が行われ、特に松平氏は、奥社や里社、講堂・大鳥居などを修復・建立している。その後幕府領になったが、飯山藩主本多氏は毎年稻20俵と杉苗一万本を寄進している。なお、近世の文化財としては、皆川廣照・廣泰寄進の絵馬「黒神馬・白神馬」や「花鳥之図」、菩提院の「十六善神画像」・「涅槃・極楽・地獄絵図」などがある。



小菅神社奥社本殿



奥社参道の杉並木



愛染岩

明治2（1869）年の神仏分離の政令により、小菅山元隆寺は「小菅社八所大神」と改称し、同年4月郷社となり、同33年5月には小菅神社と改称した。明治42年7月瑞穂全村の村社10社、無格社5社の統一がなり、昭和8年12月県社となった。

小菅山元隆寺の別当であった武内家は天正年中より継続し、明治になって神主として復職した。また、鷺尾家は、里宮神主として寛永年中より世襲し、一時倉科・宮本氏が社掌勤務となつたが、再び鷺尾氏が復職している。なお、武内家はその後奥社本殿や柱松行事等の管理していたすべてを鷺尾社家に任せることとなり、現在は小菅神社氏子総代会が管理している。

（4）大菅遺跡周辺

大菅について触れられているものに昭和6年にまとめられた森山茂市氏の「増訂小菅神社誌」がある。その部分について旧字が多いがほぼ原文のまま以下に引用する。

第二章

第十節 小菅神社の参道

略 北参道は前坂口から入るべく、小山を越えて北龍池へ出るのである。東西二通路あり、池東に出れば辨天祠を拜し、實彈射撃場に立って北方茂る學林を顧み、アゼスグに交る薄荷の芳しさと千屈菜の愛らしさを後にして大菅村の遺跡を訪ひつつ字コエンドに向ふ。又池西に出れば閑門の辺に腰を卸して、遊船二隻が歎乃の聲高く尊菜の間を漕ぎて、数個の浮島に赤黒の鯉魚が舟没隠顯するに興じつつ是亦コエンドに会する。それから坂路を下って、古の所謂加耶吉利堂即ち馬頭觀音堂を伏拜み、菩提院を横に見て表参道に合するのである。此の北参道は野沢温泉よりすれば比較的緩勾配の間道だから浴客の多數は細道ながら此のコースを選ぶのである。

第三章

十三節 傍證的の出土品及文献

小菅の先史時代は何如なる情状であったか固より知るべきでないが、今石器時代の遺物として、石鎌・石斧・石槍・石刀・石匙・石砥・石棒・土器破片等の出土品が多いのを見れば、太古原人民族の住所であったことが明かである。殊に當区の蒲原林蔵氏が明治三十二年四月中、附近の宅地を墾闢して水田を拓く工事に方り、地表の黑色壤土層一尺位鋤去した下の赭黄色の底土層に、掘立柱の址らしい圓孔の規則正しく排列すると發見したといふ。思ふに是は先住民族の住居の跡であらう。此處から石器類數点を拾い取って現に之を保存して居る。

有史以後の遺物としては、古刀・奇形の鎌（或は鋤か）・餘の木像等の發見された物數点あって往時を追想されるのである。

一、古刀

一口

字大菅の巨石の下より出た無銘の刀で、甚しく腐鏽しているが鐔は完全である。鷺尾常次郎の所蔵だ。

一、古鎌（或古鋤）

二枚



対岸から大菅を望む

甲は小林元二郎の所蔵品で、字大昔小字新奥堂から出た。長さ40.6cm、幅は刃部13.3cm、脚部18cm、脚部の末端3.7cmで、両脚の内側から刃部まで三方深い溝がある。量目1.5kgで鑄造物らしい。

乙は下高井農林学校の所蔵品で、鷺尾常次郎が大正十四年九月、大昔池の東方小字清水で石間から得た物であったが、翌年三月同校に寄附したのである。小林氏の物より稍小型で、長さ6cm短い。脚部に四個所修理した所があり、巾3cm位の鉄鋲を被覆してある。量目1.3kgで此の方は鍛製だ。

一、聖徳太子の木像 一體

焼け焦げて双手を缺き刀法等不明なるが、鑑定家は聖徳太子の立像だといふ。高さ二十輻。明治十四、五年頃小昔字蓮池北方山地の路傍で拾得され、今編者の許に安置してある。永禄の兵火に焼けて土中に埋没したものらしい。

一、古鏡 三面

文政十年七月吉原六左衛門方（今の大昔の祖）宅地方より掘出したもので、銅質帶白色で美しい。裏面に「天下一若狭」。以下略

第四章 小昔神社付近の勝區及舊蹟

第十九節 北龍池

往昔小昔山繁盛の頃、蓮池・南龍池・北龍池とて併稱されし頃には蓮草の馥郁に昔ながらの床しさを憚るだけで、面積も昔時の何分の一に減じた。又南龍池は全く浚せて稻田と化し、字「池田」といって名残を留めているが、今でも深い處は泥中に長材を横へ、其の上を渡って稻を作るのである。此等両池は全く觀を留めぬが、唯北龍池のみ依然として態を存し、通稱地字に依って大昔池といっている。東西六百七十歩（約百四十米）、南北八百六十步（約百八十米）ばかり、周回四軒弱、面積九千百廿五安ばかりで田用水の貯水池である。春は水量最も富み、碧浪の緩く漂う處に深緑の松杉を浸し、秋は水大に濁れて、蘆荻の骨立する。略

以上のように、執筆された昭和の初期には多くの人が「大昔村の遺跡」を承知していたらしく、実際に遺物も出土している。ただし、その位置については弁天島から「コエンド」にいたる間くらいしか説明しておらず、現在の大昔の南半を指す程度しか判明していない。



古絵図（延亨三年鉛）



小菅神社奥社参道周辺出土銅鏡（州浜松樹双雀鏡）



小菅神社奥社参道周辺出土銅鏡（垣根柳樹双雀鏡）



小菅神社奥社参道周辺出土銅鏡（菊紋散双雀鏡）

III 調査の記録

1 千苅遺跡

(1) 調査方法

調査対象地は、具体的な建設位置が決定していなかったこともあり、また、表土が浅く建設工事により大半が破壊されることが予想されたことから全面を調査対象とした。調査区内を 5×5 mのグリッドを設定し、南北に南からA・B・C……Fまで、東西に東から1・2・3……7と呼称した。

座標杭はX = 97,325.000 Y = -7,980.000 H = 316.331 m

X = 97,305.000 Y = -7,980.000 H = 315.507 m

X = 97,305.000 Y = -7,955.000 H = 314.985 mの3点を設定した。

調査方法は、作物であるアスパラガスの株の除去を行い、統いて表土が浅いと判断されたため手作業により表土を除去した。ジョレン・移植ゴテ等で慎重に遺構・遺物の検出を行った。遺構図は基本的に20分の1の平板及びメッシュにより作成し、遺構検出に応じてより細かい作図、レベルの記録作成を行った。写真はリバーサル、モノクロ、カラーネガにより全体、部分と出土状態に応じて適宜に撮影した。

(2) 調査経緯

所在地 飯山市大字瑞穂字千苅 155-1 ほか

原因 個人住宅建設に伴う調査

調査期日 2003年(平成14年)4月18日～6月3日

調査面積 207.5 m²

調査結果 遺構 壱穴状遺構(SB1)、土坑(SK1・SK2・SK3)

遺物 尖頭器・削器・搔器・繩文式土器・繩文石器・須恵器・土師器・鉄滓等

(調査日誌抄)

2003年(平成14年)

4月18日(木)～19日(金)器材搬入、テント設営、グリッド設定。

4月22日(月)調査開始式を現地で行う。アスパラガス株除去後、引き続きE-2・3区耕作土除去。

4月23日(火)作業続行、ジョレンがけ精査。

4月24日(水)作業続行、ジョレンがけ精査。E-2区において柱穴確認する。

4月25日(木)E・F-5区耕作土除去、ジョレンがけ精査。

4月26日(金)作業続行、ジョレンがけ精査。F-5区の攪乱部分除去。アスパラガス株除去後D-5区耕作土除去。

4月30日(月)作業続行、ジョレンがけ精査。

5月1日(火)作業続行、ジョレンがけ精査。アスパラガス株除去後D-4区耕作土除去。

5月2日(水)作業続行、精査。D-5区黒色土掘り下げに入る。

5月8日(水)作業続行、精査。D-4区黒色土掘り下げに入る。



千苅遺跡発掘調査風景

- 5月 9日（木）作業続行、精査。D－4・5区、南へ行くほど傾斜が強くなり礫が多くなる。
- 5月 10日（金）作業続行、精査。
- 5月 13日（月）作業続行、精査。D－5区にて石礫出土。
- 5月 14日（火）作業続行、精査。写真撮影。
- 5月 15日（水）アスパラガス株除去後、D－2・3区着手。D－3区耕作土から打製石斧出土。
- 5月 16日（木）作業続行、精査。
- 5月 20日（月）作業続行、精査。D－2・3区、黒色土を掘り下げる。
- 5月 21日（火）作業続行、精査。写真撮影。
- 5月 22日（水）作業続行、精査。D－2・3区の中間にて集石状の遺構が確認され、精査に入る。
写真撮影。
- 5月 23日（木）作業続行、精査。アスパラガス株除去後、F－1・2区、E－1区着手。
- 5月 24日（金）作業続行、精査。F－2区において遺構を確認する。
- 5月 27日（月）作業続行、精査。F－2区出土の柱穴を掘り下げ、写真撮影。
- 5月 28日（火）作業続行、精査。層序実測、写真撮影。
- 5月 29日（木）竪穴状遺構（SB1）掘り下げ。C－6区、D－3・4区、E・F－5区平板
により測量。
- 5月 30日（木）竪穴状遺構（SB1）精査。SB1内より黒色土器碗が出土。D－5区、平板・
レベル測量。
- 5月 31日（金）D－2・3区遺構掘り下げ、写真撮影、平板・レベル測量。
- 6月 3日（月）竪穴状遺構（SB1）測量、写真撮影、平板測量。器材搬出。

2 小菅大聖院跡

(1) 調査方法

グリットの設定は、平成 13 年度に実施した確認調査時の 5 m グリットをそのまま使用したが、地形図等にあわせるために新たに座標を設置した。グリット番号は、南北に北から 4・5・6…… 11、東西に西から B・C・D・E と付した。

座標は二ヶ所に設置し、1 X = 9888.000

Y = - 6318.000

H = 534.71 m

2 X = 9888.000

Y = - 6318.000

H = 534.71 m である。

調査方法は、表面を清掃した時点で確認される礎石等の遺構をそのまま残すことを条件に、一部では遺構の下限を把握するために発掘調査を実施することとした。

そのため、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に清掃して、遺物・遺構を検出していった。遺構平面図は、20 分の 1 のメッシュによる測量を中心に一部平板による平面図を作成した。写真は、リバーサル・モノクロ・カラーネガにより、全体・部分と確認状態等に応じて適宜に撮影した。

(2) 調査経緯

所在地 飯山市大字瑞穂字内山 7053 番地

原因 遺構の確認調査

調査期間 2002 年（平成 14 年）8 月 26 日～9 月 24 日

調査面積 687.5 m²

調査結果 遺構 大聖院礎石（圜炉裏跡、大釜跡、風呂跡、穴倉跡、池跡、雜排水池跡、排水路跡）

遺物 陶磁器、銭貨、鉄製品、銀製品ほか

（調査日誌抄）

2002 年（平成 14 年）

8 月 26 日（月）調査開始式を現地で行う。終了後器材搬入、テント設営。引き続き草刈りを行う。

8 月 27 日（火）～28 日（水）草刈り、杉株取り除き。

8 月 29 日（木）～30 日（金）残土等除去。

9 月 2 日（月）B・C-4・5 区精査、C-5 区にて圜炉裏跡確認。銭貨 1 枚出土。D-8・9 区精査。D-8 区陶磁器多数出土。D-9 台所跡にて銭貨 8 枚出土。

9 月 3 日（火）作業続行。D-9 区台所跡にて陶磁器多数出土。C-8 区精査、圜炉裏跡確認。B-9 区精査、穴倉跡確認。

9 月 4 日（水）D-10 区精査、大釜跡確認。D-11 区精査、風呂跡確認。B～D-7 区にトレンチ設定。D-7 区トレンチ内 5～10 cm 下から一面の敷石確認、拡張する。C・D-6・7 区の一画に 2～3 × 5 m の範囲で、大聖院跡の礎石下 10～15 cm において一面の敷石を確認する。

- 9月 5日（木）C－10・11区精査。E－9台所跡外に小池跡を確認。
- 9月 6日（金）E－4～7・9～10区、B－7・8区精査。Cラインにトレーナーを入れる。
- 9月 9日（月）Cライントレーナーの精査、作業続行。
- 9月 10日（火）穴倉跡、風呂跡、大釜跡、精査。D－10・11区排水路跡精査。
- 9月 11日（水）大型院跡、調査終了につき全体清掃。全体写真撮影。
- 9月 12日（木）～19日（水）メッシュ測量。
- 9月 20日（木）調査区内整備作業。
- 9月 24日（月）整備作業、器材撤収搬出。
- 9月 25日（火）～30日（月）測量。



小曾大聖院跡調査風景

3 大菅遺跡

(1) 調査方法

大菅遺跡は、北竜湖東岸の字大菅に所在する遺跡である。弁天島近くの北竜湖周回道路の周辺で、石積の痕跡が認められている部分を中心に調査地点を決定し、トレンチを設定した。

調査区の設定は、任意で比較的広い範囲に次の9ヶ所を設定した。

- 1) A区 字大菅 7515番地で、所有者は小菅の真嶋幸司氏である。林道東側で現況は杉林である。石積が現れている地点でトレンチを設定した。
- 2) B区 字大菅 7415番地で、所有者は学校法人文化学園である。林道西側の石積が現れている地点で、トレンチを設定した。現況は杉林である。
- 3) C区 字大菅 7414番地で、所有者は野沢温泉村の河野哲男氏である。湖岸と林道の間で、石積の上段でトレンチを設定した。現況は原野である。
- 4) D区 字大菅 7408番地で、所有者は小菅の大塚藤子氏である。弁天島に下る北側で原野部分にトレンチを設定した。
- 5) E・F区 字大菅 7406番地で、所有者は小菅の山岸富二氏である。弁天島に下る南側で原野部分にトレンチを設定した。湖岸側には石積がやや崩れていますが輪郭はほぼ残っている。
- 6) G区 字大菅 7400番地で、所有者は小菅の蒲原良典氏である。林道西側で杉林の中ほどに石積が現れている地点を設定した。
- 7) H区 字大菅 7533番地で、所有者は野沢温泉村の丸山常明氏である。林道東側で、平成13年に調査した地点南側の杉林の中にトレンチを設定した。
- 8) I区 字大菅 7390番地で、所有者は瑞穂の中島俊雄氏である。林道西側でもとは畑と思われる地点でトレンチを2ヶ所設定した。

調査方法は、刈り払い機による草刈り、チェーンソーによる除伐、続いて枯れ枝など堆積物の除去後、ジョレン・移植ゴテ等で慎重に掘り下げていった。実測図は20分の1で作成。レベルは任意で測量。

(2) 調査経緯

所在地 飯山市大字瑞穂字大菅 7400番地ほか8筆

原因 開発等に対処するための遺跡範囲等確認調査

調査期間 2003年(平成14年)10月8日～10月16日

調査面積 153.77 m²

(調査日誌抄)

2002年(平成14年)

10月4日(金)調査予定地点トレンチ設定。

10月8日(火)大菅遺跡発掘開始式を現地で行う。終了後器材搬入、テント設営。引き続き刈り払い機により草刈り、チェーンソーにより除伐を行う。

10月9日(水)A・B・C各トレンチ表土除去、精査。A・B区陶器小破片出土。

10月10日(木)作業続行。新たにD・E・Fトレンチ表土除去、精査。

10月11日(金)作業続行、新たにG・Iトレンチ表土除去、精査。A・B・C各トレンチ清掃後写真撮影。平板による平面図作成、レベル測量。Eトレンチ鉄製品・石器・

陶磁器等破片出土。Fトレンチ土器片出土。

10月15日(火)新たにHトレンチ表土除去、精査。D・E・F・G各トレンチ清掃後写真撮影。
平板により平面図作成、レベル測量。埋め戻し。Iトレンチにて陶磁器破片、
内面黒色土器片出土。

10月16日(水)H・Iトレンチ清掃後写真撮影。平面図作成、レベル測量。埋め戻し、器材撤
収搬出。



大菅遺跡調査風景

(整理作業)

整理作業は、飯山市埋蔵文化財センターにおいて図面整理・遺物洗浄・注記・接合・図化・トレー
ス等の作業を行なった。平成15年2月より編集作業を行い、同年3月に報告書を発刊した。

この期間中に飯山市立第一中学校2年生による職場体験学習の一環として、男子生徒3名が2日
間にわたり遺物の洗浄・注記・接合等の体験学習を行なっている。

IV 千苅遺跡

1 遺構

今回の調査で発見された遺構は、平安時代の竪穴状遺構1基、時期を明確にできない遺構もあるが土坑も3基発見されている。遺物では平安時代以外でも、旧石器ないしは縄文時代草創期の尖頭器等、縄文式土器・石器なども出土しているが、調査地区では破壊を受けていることもあって遺構を確認することができなかった。

調査対象地は、南側の低湿地及び西側を北流し千曲川に合流する樽川に向かって緩やかに傾斜していた。しかし、実際に調査を実施した結果は、テフラ層が急斜で低湿地に向かって下っており、丘陵状微高地の末端面であることが明らかとなった。

調査対象地東側の上部は既に削土されており、テフラ層も耕作等によりかなり攪乱を受けていた。逆に南側の下端は、黒色土層が厚く堆積しており人頭大以上の礫も多く黒色土層中に認められた。この礫はテフラ層にも入り込んでいることから、更新世末期の頃は河岸もしくは湖岸あったのではないかと考えられる。その後次第に黒色土が堆積し、なだらかな斜面に変化していったものであろう。



千苅遺跡調査区全景

そのため、旧石器時代あるいは縄文時代には、傾斜の強い調査地区北半より上位の微高地上に遺跡の主体があり、平安時代になってやや下位に移動したように考えられる。

層序は、調査区西面ではⅠ層が表土（耕作土）、層厚は15～20cm。Ⅱ層が茶褐色土層、層厚は20～25cmで、比較的ぼろぼろとしている。Ⅲ層は黒褐色土層で、層厚10～45cmを計る。Ⅳ層は黒色土層で層厚55cmを計り、しまりの良い土層となる。このうち大きな礫は、Ⅱ層からⅣ層に含まれ、Ⅴ層のテフラ層内にも入り込んでいる。南向き斜面のため南側へ行くほど各層が厚くなる。

（1）竪穴状遺構（SB1）（図5）

形態・規模からも竪穴式住居と考えても差支えないが、ここでは竪穴状遺構として報告する。

調査区の北東隅E-1に位置する。確認面はテフラ層であるが、約20cmの耕作土下の検出であり、既に削土されていることが伺えた。また、南側は破壊されており不明であるが、南北約3.8mと推定される。東側は調査区外に続いため、東西の幅は不明である。形態的には隅丸方形あるいは不正橿円形と思われる。床面にはピットが1カ所認められるが、浅いため柱穴となりえるかどうか不明である。竪穴掘り込み面の周囲に人頭多大の礫が認められるが、これはテフラ層に入り込んでおり、自然的なものと判断される。北側の床面及び壁面にあるある礫は、明らかに持ち運ばれたものであり、特に壁際の礫は石組み状にまとまっているがカマドとは相異している。

本竪穴遺構は出土遺物から平安時代に位置付けられるが、柱穴や壁際の石組み状の遺構から一般的な竪穴式住居とは異質な感じを受ける。覆土から鉄滓などの出土もあることから、火床などは認められなかつたが鍛冶に関係する施設ではないかとも考えられる。

遺物は、黒色土器焼や須恵器破片・鉄滓などが出土している。



竪穴状遺構



同遺構覆土出土墨書き土器

(2) 土坑(図5)

1号土坑(SK1)

D-3区において検出する。長径1.3m、短軸0.55m、深さ45cmを計り、平面は長方形を呈する。坑内には20~50cmの礫が混入されている。底面には地山の礫も認められるが、その多くは土坑覆上部に認められる。出土遺物はない。

2号土坑(SK2)

D-3・4区において検出される。長径1.9m、短径1.3m、深さ20~40cm計り、平面形態は不整橢円形である。いくつかの土坑が重複している可能性がある。出土遺物はない。

3号土坑(SK3)

D-2区において検出される。長径1.6m、短径0.7m、深さ27cmを計り、平面は橢円形を呈する。5~20cmの礫がまとまっている。礫中に須恵器片が出土している。



1号土坑



3号土坑

2 遺物

(1) 旧石器時代～縄文時代草創期の石器

各グリット及び竪穴状遺構から散在的に出土したもので、本来の位置から離れて出土したものである。器種では、尖頭器・削器・搔器などがある。

尖頭器（図6-1～6）

合計6点出土している。形態的には幅広で大型のもの（1～3）と、細身の柳葉形のもの（4～6）に分類される。3は安山岩であるが、他はすべて頁岩製である。

削器（図6-7～12）

5点出土している。7～9は頁岩製、10～12は黒曜石製である。何れも縁あるいは端部に加工を施して刃部を作出している。9は刃部からは搔器として考えてよいかもしれない。

搔器（図6-12～14）

3点出土している。12は黒曜石製で、両端に刃部が作られる複刃式、13は安山岩製の典型的なエンドスクレイバーである。14はやや幅広な安山岩製で、厚くはないが端部に刃部を作出している。

以上の石器群は、時期的にも同一時期との確証はないが、大きく異なる時期とは考えていない。むしろ、尖頭器に組成される削器・搔器として旧石器時代終末期の石器群と考えて差支えないだろうと思われる。



旧石器時代～縄文時代草創期の石器

(2) 縄文時代の遺物

縄文時代の遺物には土器及び石器がある。

縄文式土器 約20点出土している。出土地区は斜面が急なD-3～5区にまとまっていたが、遺構等は認められないことからことから台地上部からの流れ込みの可能性がある。

土器は何れも縄文時代前期末から中期初頭のものである。三角印刻文や半截竹管状工具による平行条線文などの文様が認められる。



縄文式土器

石 器（図7）

縄文時代の石器には、打製石斧2、石匙1、剥片1点がある。

打製石斧（1・2）は、斧というよりも、スコップや移植ゴテなどのように土堀具と考えられている石器である。3は、縄文時代前期に特徴的なつまみ部が作出されているもので、石匙と呼ばれるが皮剥用の携帯ナイフと機能が考えられている石器である。



縄文時代の石器

（3）平安時代の遺物

竪穴状遺構を中心として、各グリットからも散在的に出土している。出土遺物は、土師器甕・椀、須恵器甕、灰釉陶器皿・椀、鉄滓などである。

土師器甕・椀（図8-1～17）

甕は何れも破片で全形を伺いえるものはない。口縁形態は外反・内屈等様々であるが何れも外面調整はロクロ調整されている。椀は黒色土器が大半である。このうち4点の椀に墨書きがなされている。図8-1は「真」、7は記号状で判別できない。12は「大」、15は不明である。底部調整は、回転糸きり痕をとどめるもの、回転ヘラ削り・静止ヘラ削りと多様である。

灰釉陶器（図8-19～24）

何れも小破片であるが、6点図化している（図8-19～24）。灰釉は刷毛塗りが多く、唯一漬

け掛けの例もある（図8-19）。



平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器

鉄滓

鉄滓は、精錬や小鋳冶作業で生じる鉄カスである。竪穴状遺構からの出土で、この施設で鍛冶に関係した作業が行なわれていたと推定される。何れも鉄分が多い鉛状の鉄滓である。



鉄滓

V 小菅大聖院跡

1 遺構

(1) 概要

大聖院跡は奥社参道入口の南側にあり、梅鉢積と通称される壮大な石垣の上に屋敷地がある。現在は庭園と護摩堂が残されており、跡地には杉が植栽されていたが、これ以上大きく成長すると支障になるため平成14年2月に伐採された。

大聖院の建物規模については、昭和30年代後半まで存在していたことから、地元の古老も承知していた。しかし、詳細な規模等となると記憶がまちまちであったりして明確にすることはできなかった。また、かつての別当邸宅であり、一般の人は通用口から勝手付近までしか入ることができなかつたことも影響しているらしい。

建物跡は、礎石を確認することができたため間口17.5間、奥行き6.5間と推定することができた。入口は、表玄関（正面玄関）と通用口（西入口）、勝手口（南入口）の3ヶ所がある。

表玄関は、現在の記念碑付近にあったとされ、建物の西側にある、回廊式池の石橋を渡った正面に位置している。表玄関より北側が座敷とされ、座敷の中ほどB・C・5区に囲炉裏と思われる、 $1.0 \times 1.3\text{ m}$ の長方形の灰原を確認している。また、D-4区では建物の北東隅の縁石と思われる切石の列を検出している。



小菅大聖院跡全景

通用口は、表玄関の南側に位置し、西向きの入口である。入口手前には 1.5×4 mの範囲で石畳があり、統いて3段の石段がある。入口に入った土間の左正面に穴倉が検出されている。通用入口の左側、建物の外に、径60cmで深さ30cmの石で回りを囲んだ円形の穴を検出した。中には焼土が認められた。

通用口から入って北側が茶の間で、二部屋あったと考えられる。C・D-8区の中ほどに匂炉裏と思われる1.2mの方形の範囲で灰原を検出している。B-8区石列の近くで銭貨が3枚出土。茶の間の中ほどD-7区にある礎石より10~15cm下面の 3.1×5.2 mの範囲で一面に敷石を確認。この敷石は何を意味するのか今後の課題である。茶の間の東側、D-8区の礎石周辺から多量の食器類、銭貨5枚が出土。

通用口から入って土間、正面に板の間があり、茶の間の南側に位置する部屋である。この板の間にも匂炉裏と思われる 1.0×1.8 mの長方形の灰原を検出。この匂炉裏跡と思われる所から火打ち石（安山岩）が出土している（地元の人の話では、一時この場所において柱松神事の火口焼が行なわれていたらしい）。

D-9・10区において発見された台所は、板の間の東側に位置し、D-10区の位置には平石で 1.6×2.2 mの幅で石が敷き詰めてあり台所から土間へと続く。こここの礎石の周辺からは、多量の食器類が出土している。他には銭貨11枚が出土している。

建物南側から入る勝手口は、入口に階段状に配石が認められ、入口から続く所は土間になっていたと思われる。入口西側には馬小屋が2部屋あつたらしい。入口東側には、手前に風呂焚口跡が確認できた。勝手口西側には便所がある。建物から南側へ7尺ほど出ていたと思われる。



小菅大聖院跡出土の礎石

(2) 遺構各節

池跡（図 10）

E-8・9区に位置し、建物から 1.2 m ほど離れた東側で、敷地東側の石積の下に位置する。1.4 × 1.5 m の方形で、深さ 30 cm。内側には石組がなされている。底面も石が敷き詰められている。東側の石積上部には水路があり、池の南側から滝になって落ちている。そこから水路で引水したと思われる。



池跡

雑排水池跡（図 10）

D・E-9 に位置し、台所の東側に隣接して作られている。直径 1.1 m の円形、深さ 47 cm の大きさで内側には石組がなされている。底面には石が敷き詰められていない。台所に隣接して作られているので、台所の排水が流れ込んでいたと思われる。



雑排水池跡

大釜跡（図 10）

D-10 区に位置し、台所南側の土間に直径 80 cm、深さ 14 cm の大釜の跡と思われる遺構が検出された。15 ~ 25 cm の石で石組がなされ回りを粘土で覆っている。上部は壊されていて一段しか石組が残っていない。焚口と思われる幅 50 cm、深さ 13 cm ほどの石組も検出。遺物は、銭貨 1 枚出土。



大釜跡

風呂焚口跡（図 10）

C・D-11 区に位置する。建物南側の勝手口を入って東側にて、直径 80 cm、深さ 13 cm の風呂焚口跡と思われる遺構が検出された。上部は壊されていて、10 ~ 30 cm の石で二段に石組がなされ回りを粘土で覆っている所だけが検出。底面に平石が敷き詰められ、焼土も残されている。



風呂焚口跡

穴倉跡（図10）

野菜などの食料を貯蔵するための施設である。B-9区に位置する。通用口から入った土間の中程で検出。長径3.2m、短径1.7mの長方形で、深さは90cmを計る。穴倉の壁は土のままであったようで石積されていなかった。



穴倉跡

排水路跡（図9）

D-10・11区に位置し、長さ5.8m、幅20～25cm、深さ30～38cmを計る。排水路の北側には、雑排水池があり、そこからの排水路と思われるが、接続が確認できなかった。排水路は両側とも石積で2段から3段積まれている。南側へと続いているが、南側にはコンクリートで作られた現在使用されている池があり、池を造った当時に壊されたと思われる。



排水路跡

2 遺物

大型院跡地内から、多くの生活用品が発見されている。これらは、表土の清掃時に少し埋もれていたものが検出されたもので、建物の存在していた昭和30年代までの食器や生活用具である。一部において下層のトレンチ調査を実施したが、その折にはやや古い近世や一部中世の遺物も発見されている。以下に概説する。

(1) 食器類

食器類には、甕・飯茶碗・湯飲み茶碗・皿・徳利・猪口などがある。時代的にも近世から昭和まである。



甕



甕



甕



甕



五徳



陶磁器椀



磁器椀



磁器皿



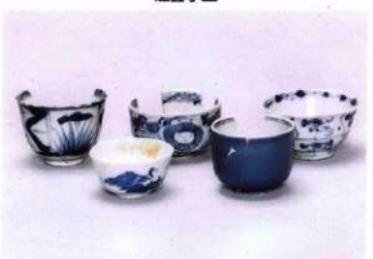
磁器皿



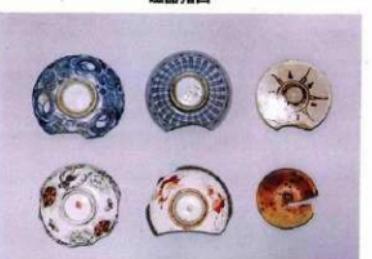
磁器小皿



磁器猪口



磁器湯呑椀



磁器蓋物



磁器皿・鉢



陶磁器皿・角皿



陶磁器壺・土瓶



陶磁器線香立て・そば猪口



陶器神酒徳利



陶器燈明皿



陶器燈明皿



陶器燈明皿

(2) 中世珠洲陶器

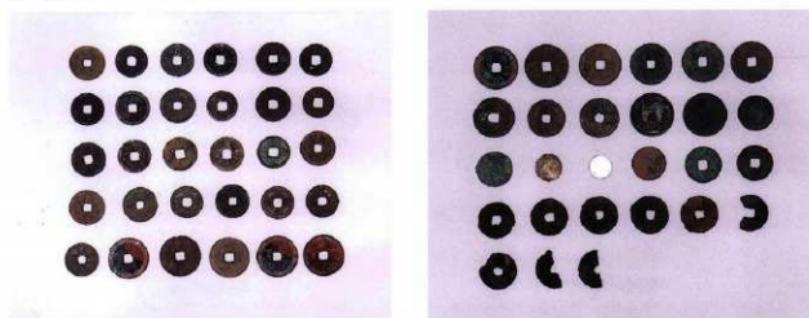
能登半島珠洲郡市で焼かれた中世陶器であり、中世には北信濃に多く搬入されている。この場所が中世に遡ることを証明する資料である。何れも甕あるいは壺破片で、全体の形状は不明である。



珠洲陶器片

(3) 錢貨 (図 13・14)

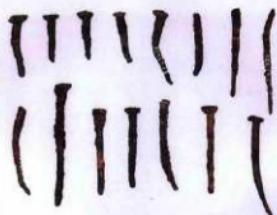
近世に使用された寛永通宝が大半で、この他明治期以降の一銭などもある。また、中世に使用された輸入錢貨である天禧通宝（初鋤年 天禧年間 1017～22年）や永樂通宝（同 1408年）が各1点出土している



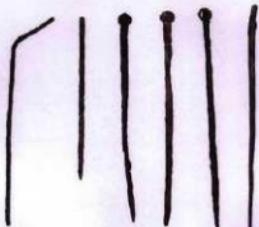
錢貨

(4) 鉄製品 (図 15～17)

鉄製品には、釘類・火箸・切り出しナイフ・鍼・鎌・鍔・斧などがある。釘には角釘と丸釘があり、中には木材の腐植部の付着しているものもある（図 15－9・10）。



釘



火箸



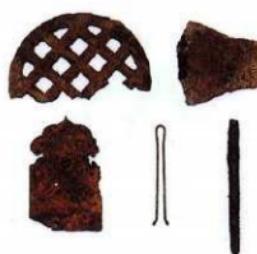
切り出し・鉄・鎌等



鎌等



鉄斧



簀 (さく)・飾り金具等

(5) 石製品(図18)

石製品には、砥石・硯・石盤などがある。砥石は何れも小さく、目の細かい仕上げ砥である。硯はかなり破損しているが、形態的には明治以降のものであろう。石盤には大正二年と刻まれている。



砥石



硯・石盤

(6) その他の遺物 (図19)

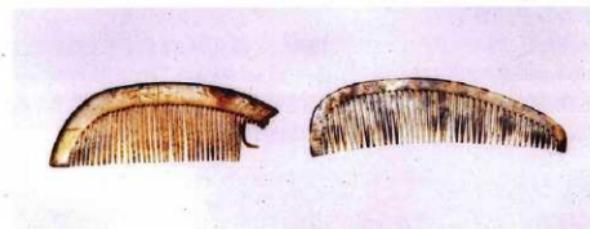
真鍮や銅製品、銀製品等を一括して報告する。刀の锷や鈴、飾り金具、櫛・煙管などがある。



鉔・鈴等



煙管



櫛

VI 大菅遺跡

1 遺構

(1) A区トレント(図2)

A区は北竜湖周回林道より東側の杉林の中で、南側斜面のすそ野で比較的なだらかな部分で、石積が現存している部分に隣接して、 1.5×3.6 mのトレントを設定した。表土は $10 \sim 35$ cmの黒褐色土層、II層は 10 cmの茶褐色土層で、III層目が地山面となる。隣接している石積は、南側の斜面から北側方向へと続く。石積は平石を2段、3段に横に積み上げて $40 \sim 50$ cmの高さにしてある。遺物は陶器小破片2点出土。

(2) B区トレント(図2)

北竜湖周回林道より西側の杉林の中で、石積が現存している部分に隣接して、 2.0×4.0 mでトレントを設定した。表土は $25 \sim 35$ cmの黒褐色土層、II層目 20 cmの茶褐色土層で、III層目が地山面と続く。特に中央の大石は、地山面まで入り込んでいる。この区域は石積で、上段と下段の二段の平坦な区域を造成したと思われる。石積の高さは 120 cmほどある。根石部分は $50 \sim 70$ cmの大石で地山面より積み、二段目も 50 cm前後の石を積み、三段目は平石で積み上げている。

遺物は陶器小破片3点出土。

(3) C区トレント(図2)

B区の南西側に位置する湖岸へと続く緩やかな斜面で、現況は雜木林である。ここに 2.0×4.0 mのトレントを設定する。トレントの東南側に石積が現れている、崩壊しているが高さは $40 \sim 65$ cmであり、平石を横に積むタイプである。表土は 15 cmの黒褐色土層、II層目が 10 cmの茶褐色土層、III層目が礫を多く含む黄褐色土層になる。C区には出土遺物はなかった。

(4) D区トレント(図3)

弁天島に下る北側の原野部分の西向き斜面に、東西に 2.0×6.0 mのトレントを設定する。黒褐色土層が $15 \sim 25$ cmで、その下が茶褐色土層である。本トレントからの出土遺物はなかった。

(5) E区トレント(図3)

弁天島に下る南側で、葦が生茂っている平坦部分で、満水期には水面下となる地点である。東西に 2.0×6.0 mのトレントを設定した。表土は $25 \sim 30$ cmの黒褐色土層、II層目が茶褐色土層である。トレントより西側へ 5 mほどの位置に湖岸にそって崩壊が著しいが石積が確認できた。

遺物は、鉄製品1点、陶器小破片2点、石器2点出土した。

(6) F区トレント(図3)

弁天島に下る南側でE区トレントから南へ 10 mほどの位置、現況は原野で平坦部分であり、満水期には水面下となる地点である。南北に 2.0×5.0 mのトレントを設定した。表土は $20 \sim 30$

cmの黒褐色土層、II層目は礫を多く含む茶褐色土層である。トレントより西側へ5mほどの位置に、湖岸にそって所々崩落はしているが石積が確認できた。

遺物は、土器小破片が出土している。

(7) H区トレント(図3)

北竜湖周回道路東側の杉林の中で、平成13年度に確認調査をしたIII区とV区の中間地点で、西向きに緩やかな斜面で、「さぐざえむ屋敷」といわれている場所の南側にあたる一角に、東西に1.0×6.0mトレントを設定した。旧畠地と思われる。礫はほとんど含まれなく、表土は20～30cmの茶褐色土層、II層目に黄褐色土層が現れる。出土遺物はなかった。

(8) I区(図3)

北竜湖周回道路の西側、湖岸に近い所で西向きで緩やかな斜面にトレントを設定する。旧畠地と思われ、現況は雜木林である。中間地点の南北に、法面と思われる30cmほどの段差が認められるので、上下で2ヶ所のトレント設定。

1) I-1トレント

東西に1.5×3.0mのトレントを設定する。表土は25～35cmの茶褐色土層、II層目に黄褐色土層が現れる。出土遺物はない。

2) I-2トレント

東西に1.5×3.0mをI-1トレントの西側1.5mに設定する。表土は40～50cmの茶褐色土層、II層目に黄褐色土層が現れる。西側へ行くほどI層目が厚くなる。

遺物は、内面が黒色された土器小破片1点、陶器小破片1点出土。

(9) G区石積

周回道路西側の杉林の中ほどで、4.0×8.0m範囲に石積が二段に確認できた。一段目は、2.0×5.0mで高さは70cmほどである。二段目も、2.0×5.0mで高さは50～80cmほどである。平石を横に積み上げてある。

2 遺物

各トレントより遺物が若干出土している。F区からは平安時代の土器片・黒色土器片が出土しているが、小破片のため図示できない。また、A区からは青磁の香炉様の小破片、B区からは染付小破片、E・I区から青磁の小破片が出土している。そのほか、E区から石器剥片2点が出土している。



A区



B区



D区



F区



H区



I-1区



I-2区



各区出土遗物

VII おわりに

国庫補助事業を受けて実施した3遺跡の調査は、個人住宅建設や遺構の確認、あるいは開発対応のための遺跡範囲確認調査とそれぞれ目的が異なっていた。

千苅遺跡の発掘調査は、文字通り緊急発掘調査であった。從来から平安時代の遺跡として知られており、その後旧石器時代～縄文時代草創期に位置付けられる一連の石器群の存在が明らかとなつた。しかしながら、すべて表面採集によるもので、その実態は依然不明であった。

今回の発掘調査は、住宅建設という緊急発掘調査であったが、そういういた不明確な部分が明らかとなる期待も少なからずあったことも事実である。しかしながら、調査結果は逆に集中して採集されていた丘陵上部は極めて表土が浅く、耕作によりほとんどが破壊を受けていたことが明らかとなつた。このことから、今後も千苅遺跡の石器群が調査によって明らかにすることは難しいことといわざるを得ない。

平安時代の住居址と考えてよい竪穴状の遺構が1基発見されたことは大きな成果であった。鉄滓や石組み遺構、柱穴の有無・位置など当該期の一般的な住居址とはやや相違していることから「竪穴状遺構」としたが、鍛冶職人の作業場あるいは兼用住居と考えられるのではないかと推定している。

小菅大聖院跡は、中・近世の 小菅山元隆寺を解明するに重要な場所である。昭和30年代後半の解体以降、杉の植栽や記念碑の建立など大きく様変わりした。私達が現地を見た平成12年には、杉や雑木が繁茂しており中に入ることも大変であった。その後、地元氏子総代会を中心として整備の計画が持ち上がり杉も大きくなりすぎたため伐採することになった。ただし、前述のように解体後の様々な要因によって、建物の礎石等の多くは残されていないのではないかと考えられていた。

調査の結果、跡地内を清掃した段階で多くの礎石を確認することができた。杉の根が大きくなりすぎており、そのため礎石も動いていたが、一部正面玄関付近と台所付近を除き聞き取り等も明らかにできた。今後さらに文献調査もあわせて研究を進めていく必要がある。

大菅遺跡は、観光地として脚光を浴びている北竜湖の東岸一帯を指しているが、文献に現れていてもその実態が把握できない遺跡であった。

今回の調査によつても、若干の出土遺物は認められるものの中世村落の実態はつかむことができなかつた。廃村の後、近世に畑や水田として開墾されたことが一因としてあるのだろうか。いずれにしても、今後とも継続して範囲や中心地について研究していきたい。

最後に、本調査に関わられた方々に厚く御礼を申し上げる。



図1 千苅遺跡周辺地形図 (1:2500)

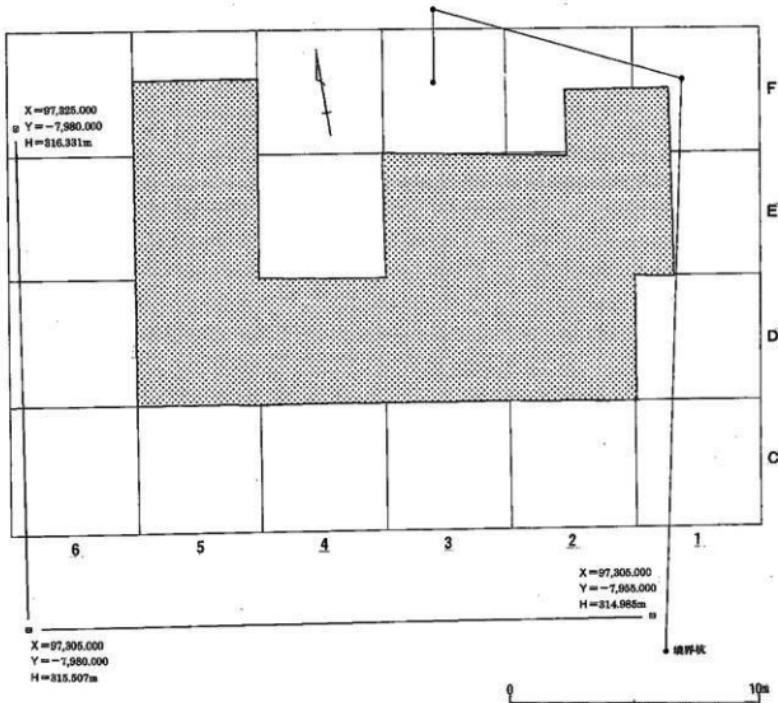


図2 グリッド設定図

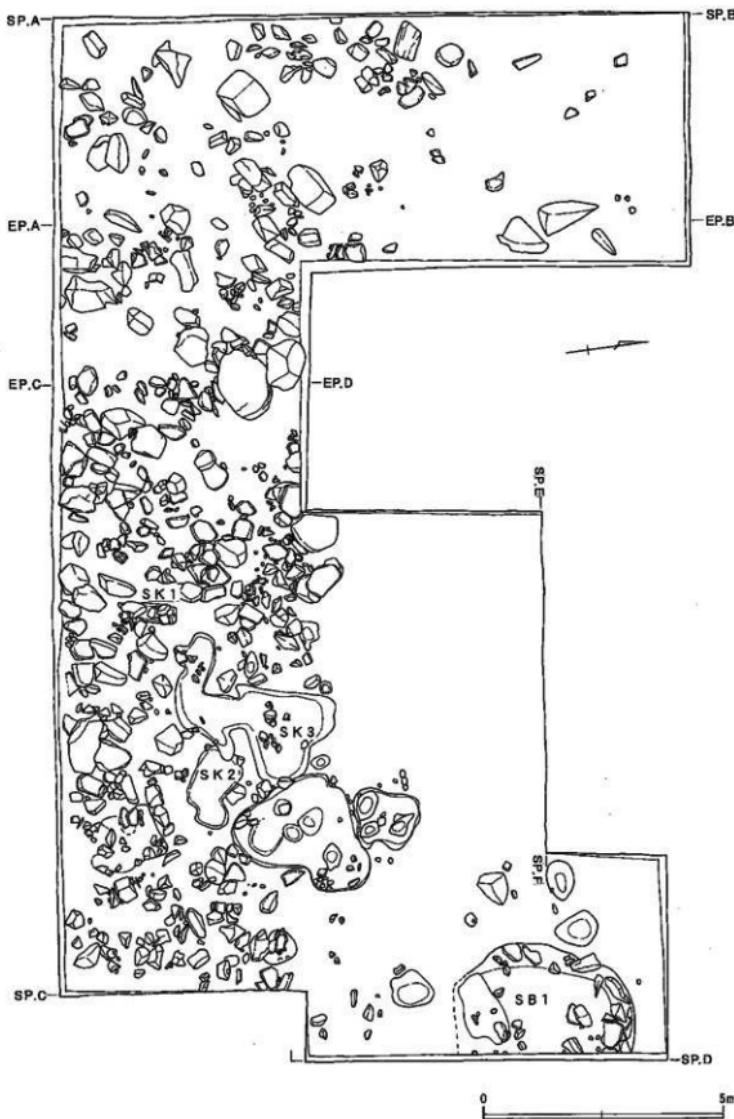


図3 調査区全体図 (1 : 100)

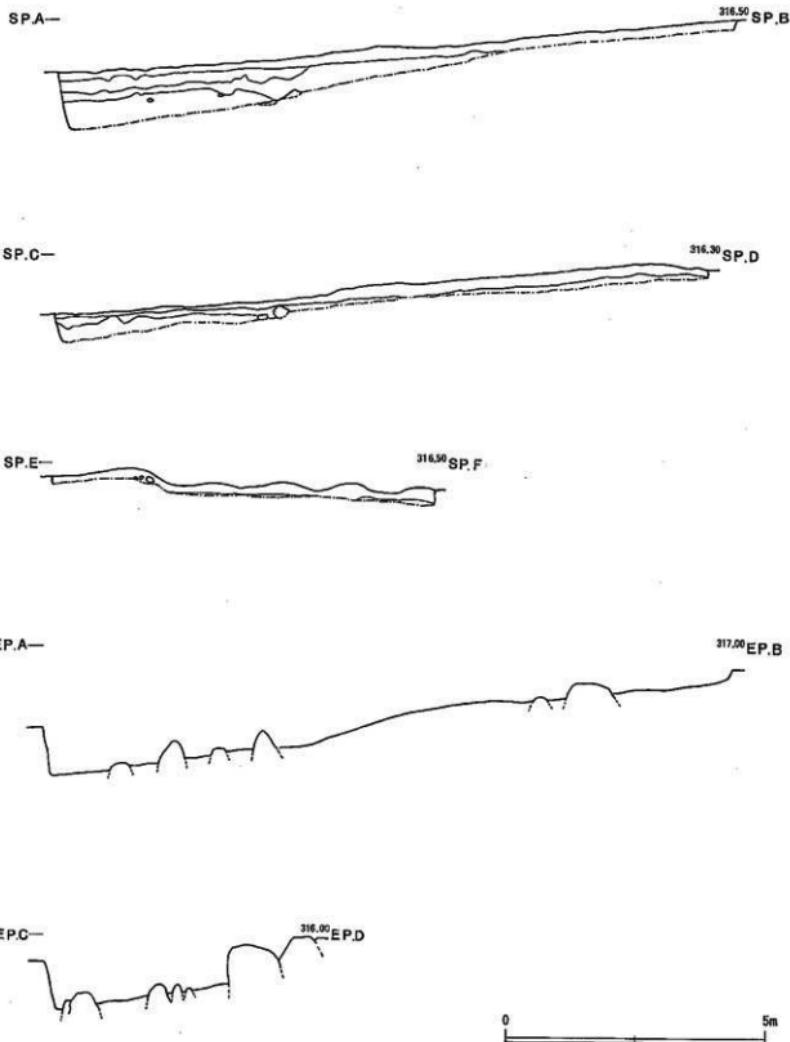


図4 セクション・エレベーション実測図 (1 : 100)

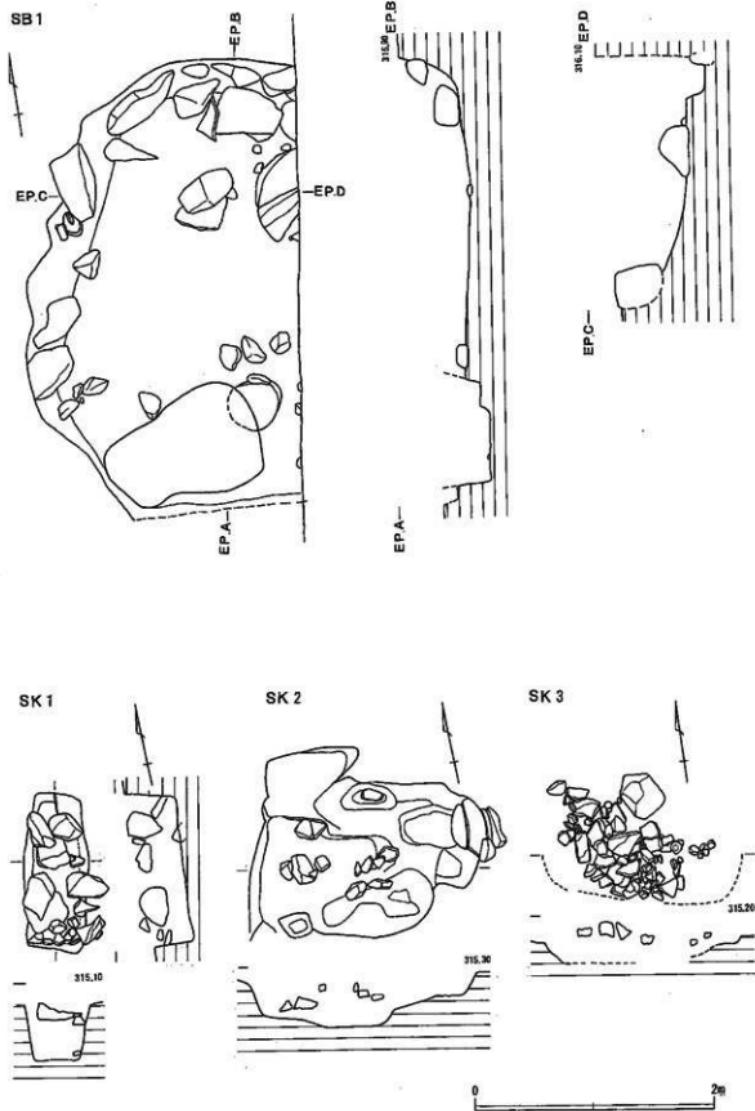


図5 遺構実測図 (1 : 40)

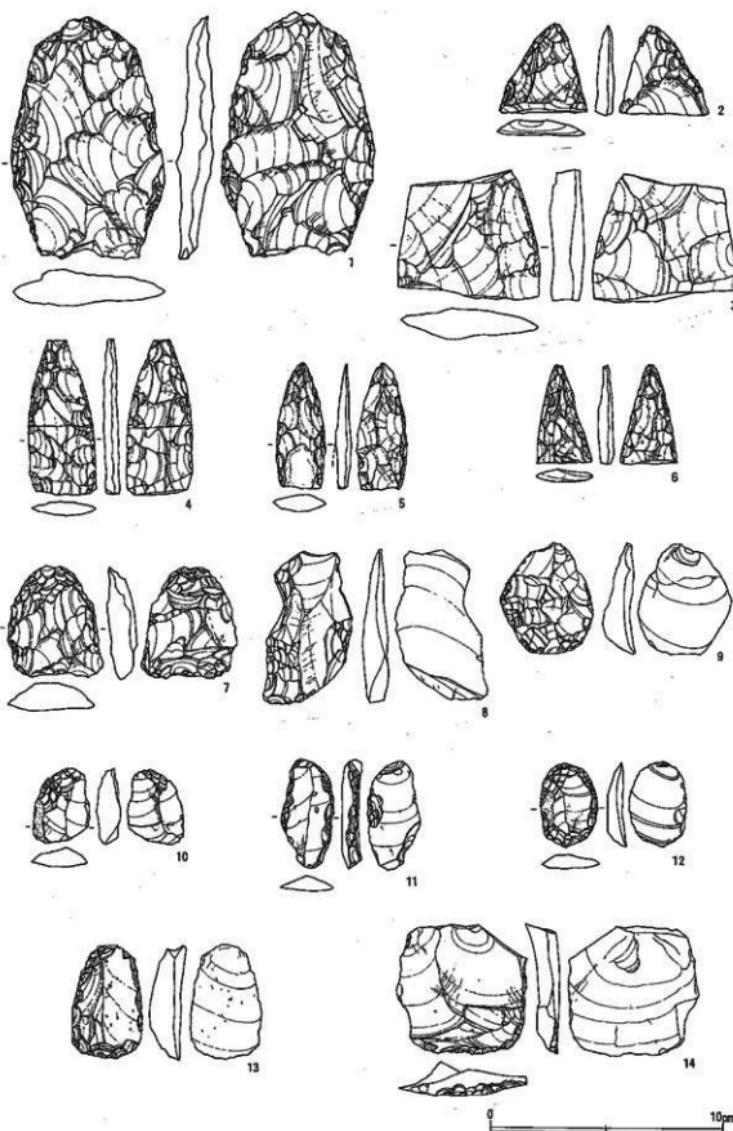


図6 旧石器時代～縄文時代草創期の石器実測図 (1 : 2)

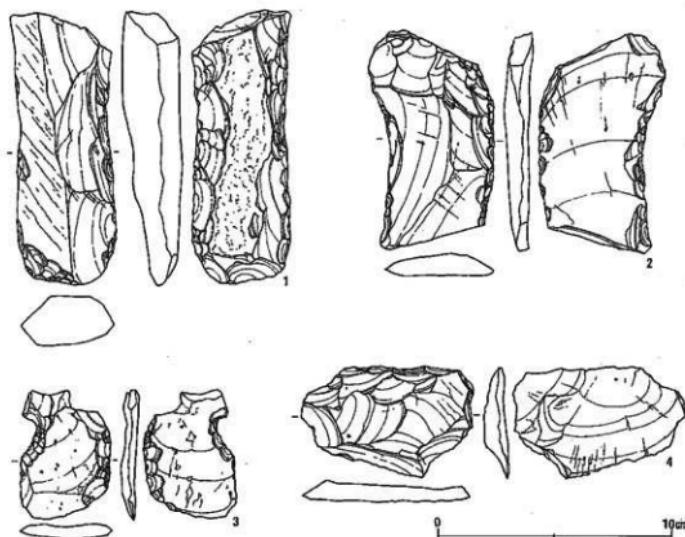


図7 縄文時代石器実測図（1：2）

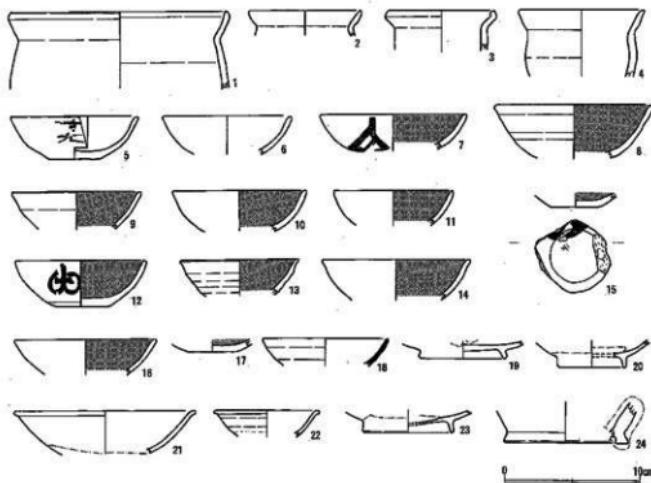


図8 平安時代土師器・須恵器・灰胎陶器実測図（1：4）

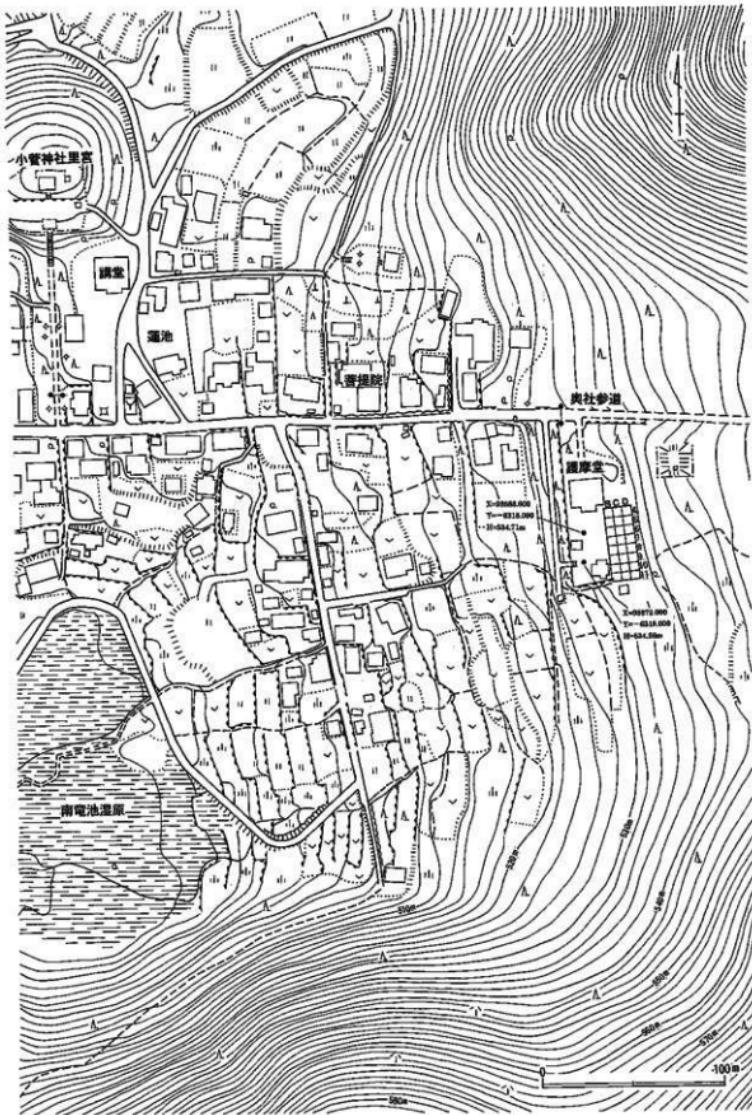


図1 小菅大聖院跡周辺地形図 (1:2500)

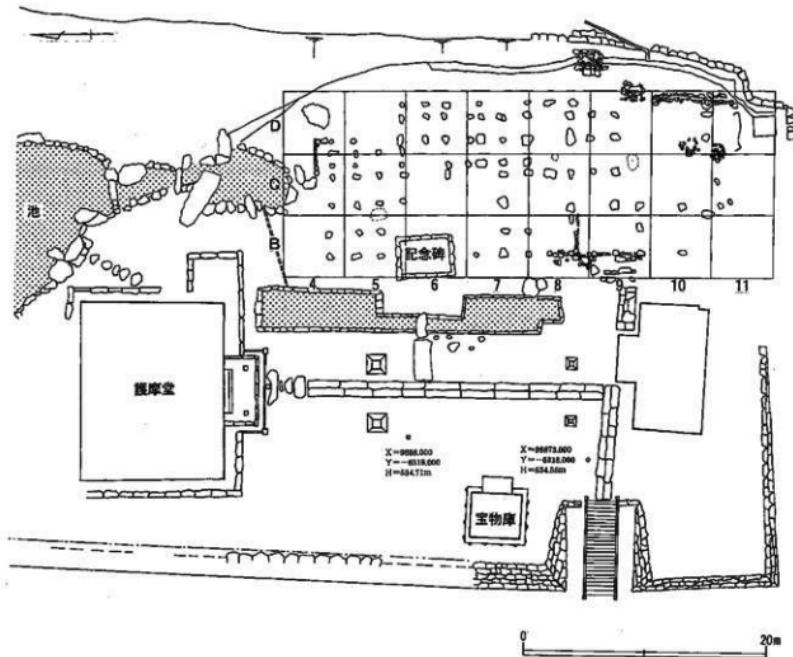


図2 グリッド設定図及び周辺建物等配置図（1：400）

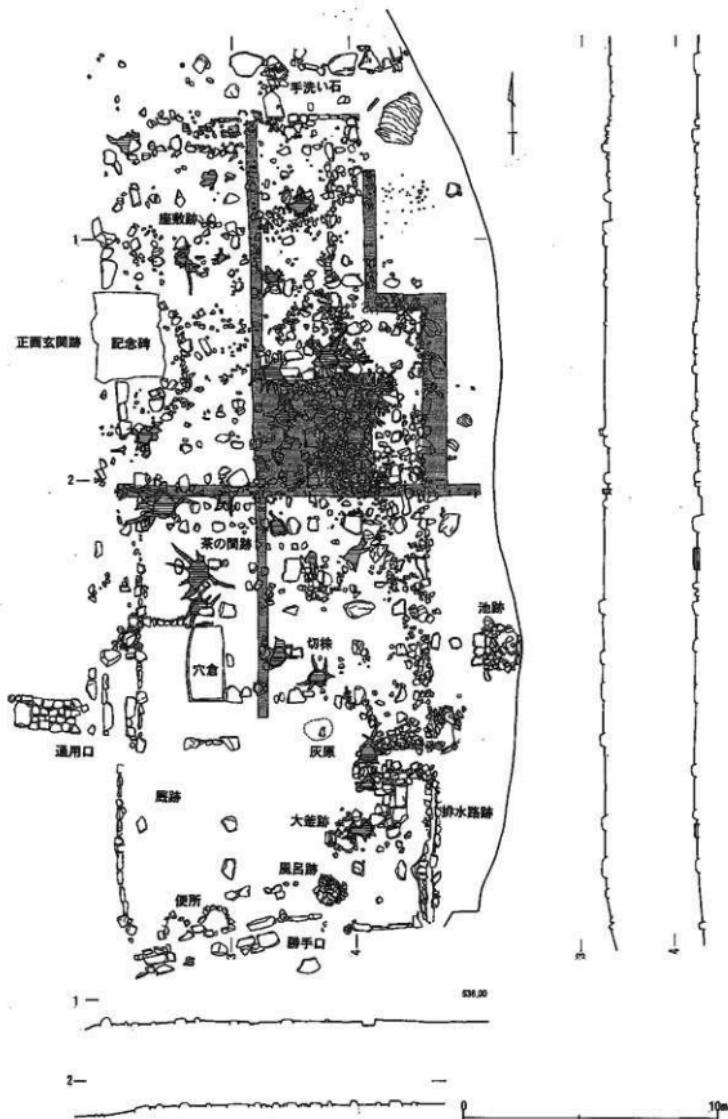


図3 造構全体図及び発掘調査区域図 (1 : 250)



図4 遺構分布図1 (1:80)

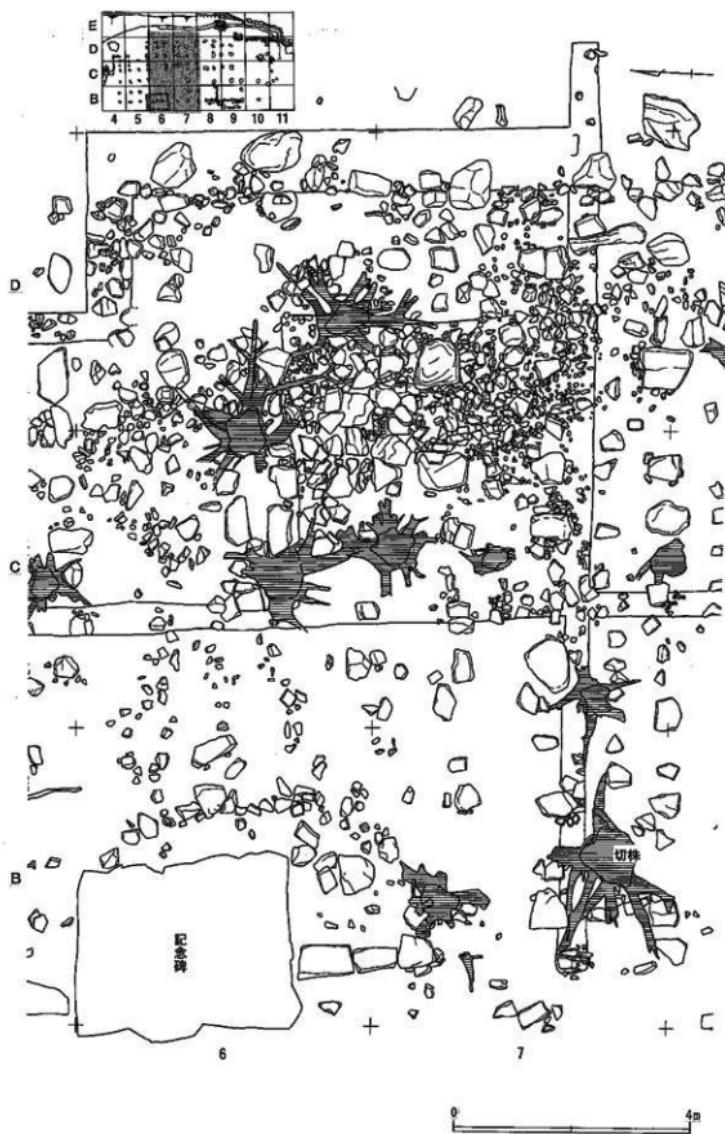


図5 造構分布図2 (1 : 80)

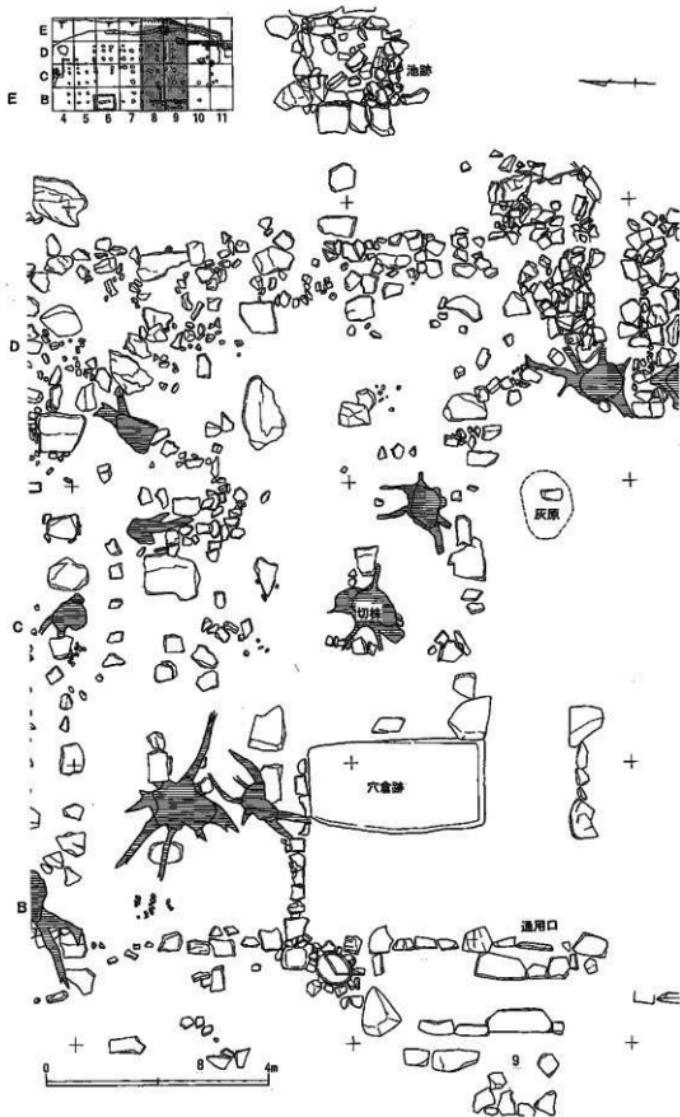


圖6 造構分布図3 (1:80)

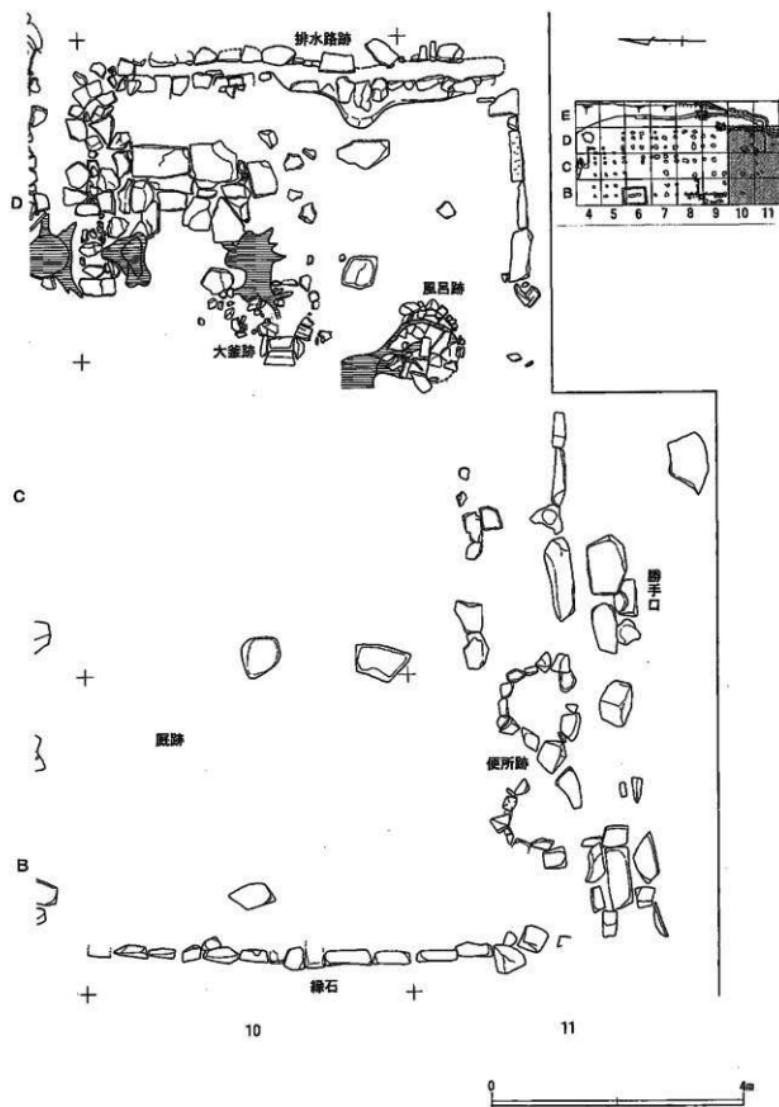


図7 造構分布図4 (1:80)

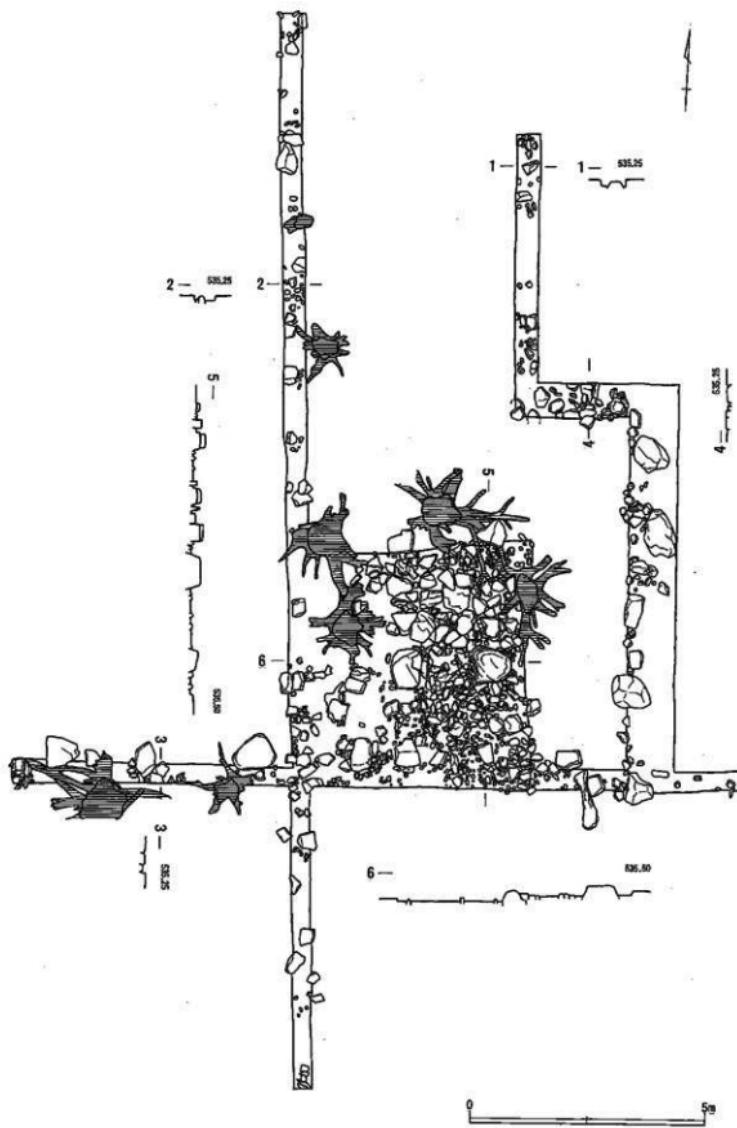


図8 発掘調査区遺構図 (1 : 100)

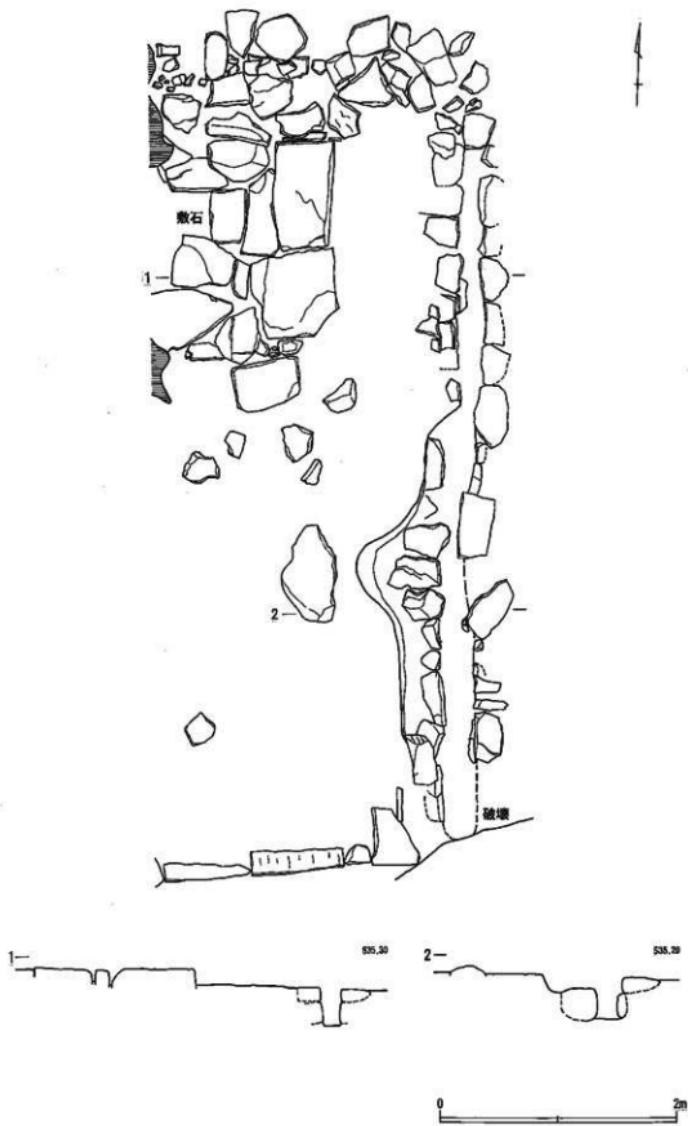


図9 排水路跡実測図 (1 : 40)

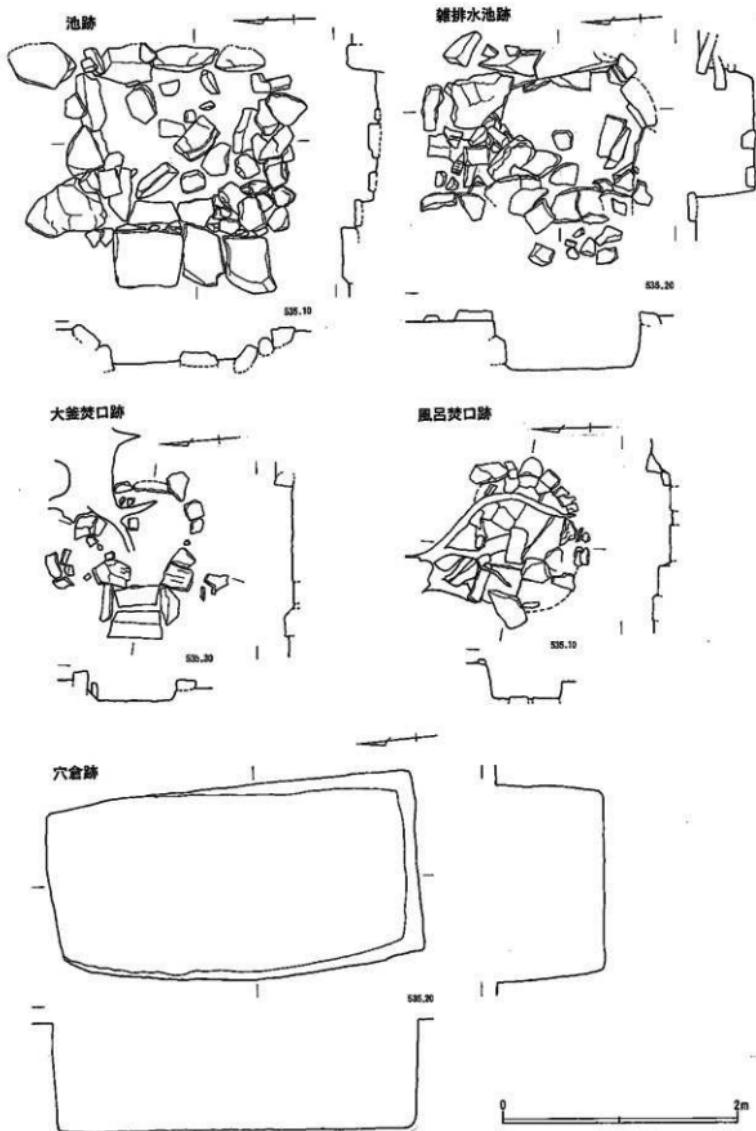


圖 10 各遺構實測圖 (1 : 40)

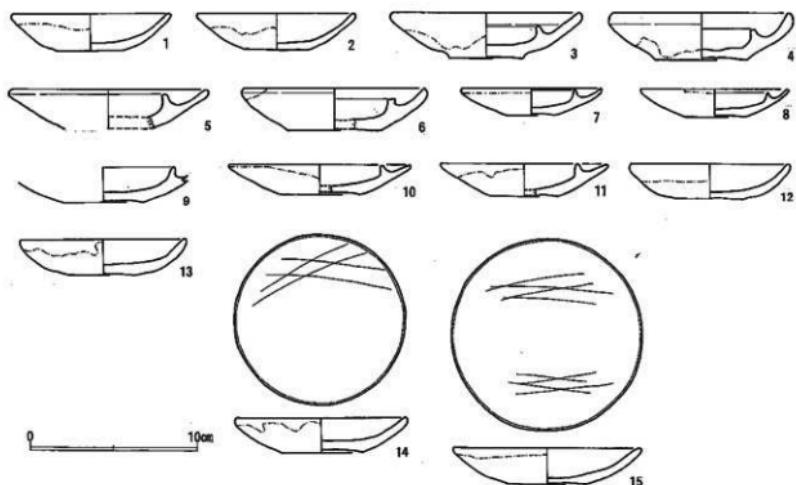


图 11 灯明皿・皿类测图 (1 : 3)

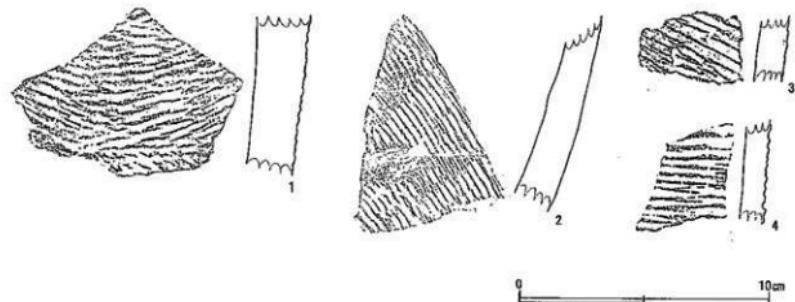


图 12 珠洲陶器拓本图 (1 : 2)

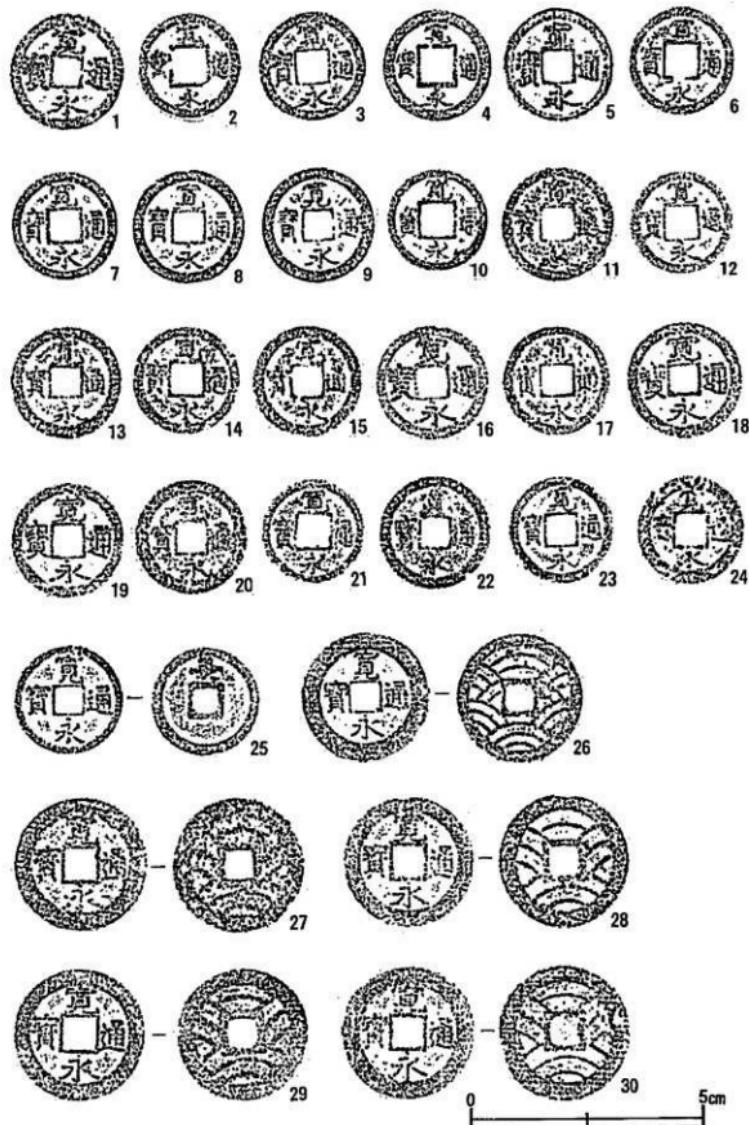


圖 13 錢貨拓本圖 (1:1)

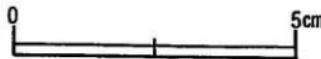
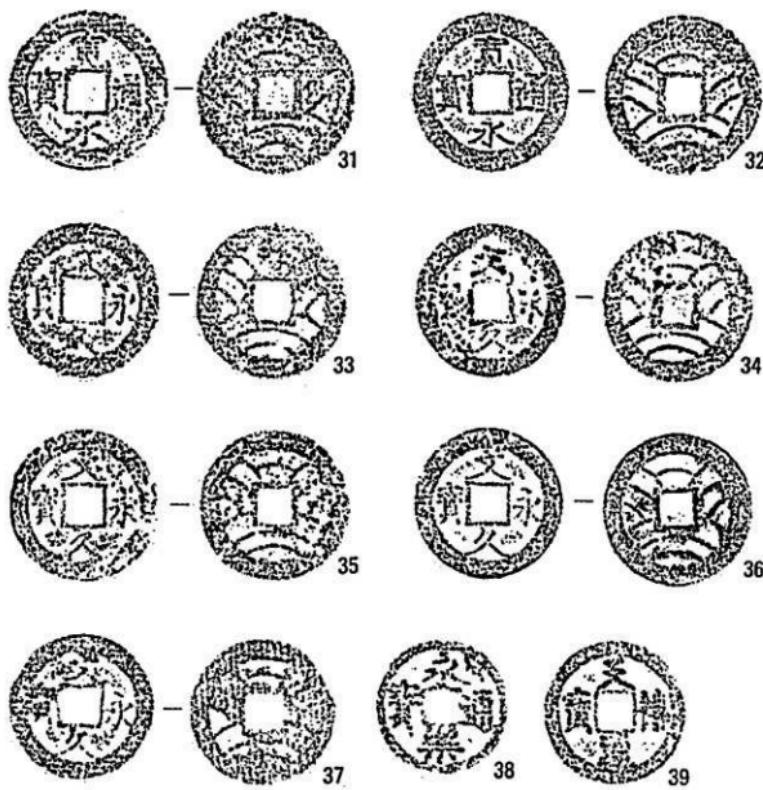


図14 錢貨拓本圖2 (1:1)

	錢名	初鑄年(西暦)	直徑mm	重さg	備考
1	寛永通寶		25	3.1	
2	寛永通寶		23	2.4	
3	寛永通寶		24	2.7	
4	寛永通寶		24	3.5	
5	寛永通寶		25	3.8	
6	寛永通寶		23	1.9	
7	寛永通寶		24	2.9	
8	寛永通寶		25	2.9	
9	寛永通寶		25	3.7	
10	寛永通寶		23	1.8	
11	寛永通寶		25	2.5	
12	寛永通寶		23	1.5	
13	寛永通寶		24	3.2	
14	寛永通寶		23	2.9	
15	寛永通寶		24	2.0	
16	寛永通寶		24	2.5	
17	寛永通寶		23	2.3	
18	寛永通寶		25	3.4	
19	寛永通寶		25	2.5	
20	寛永通寶		24	3.5	
21	寛永通寶		23	1.6	
22	寛永通寶		24	3.0	
23	寛永通寶		24	1.6	
24	寛永通寶		23	2.2	
25	寛永通寶		23	2.6	背上に「長」
26	寛永通寶	明和5年(1768)~	28	4.7	明和4文銭21波
27	寛永通寶	明和6年(1769)~	29	4.8	明和4文銭11波
28	寛永通寶	明和6年(1769)~	28	5.5	明和4文銭11波
29	寛永通寶	明和6年(1769)~	28	5.7	明和4文銭11波
30	寛永通寶	明和6年(1769)~	29	4.5	明和4文銭11波
31	寛永通寶	明和6年(1769)~	28	4.8	明和4文銭11波
32	寛永通寶	明和6年(1769)~	28	6.2	明和4文銭11波
33	寛永通寶	明和6年(1769)~	27	3.3	明和4文銭11波
34	文久通寶	文久3年(1863)~	27	3.8	
35	文久通寶	文久3年(1863)~	26	3.3	
36	文久通寶	文久3年(1863)~	27	3.5	
37	文久通寶	文久3年(1863)~	26	3.3	
38	永樂通寶		24	2.3	
39	天祐通寶	天祐年間(1017~22)	25	3.9	

表1 出土錢貨一覽表

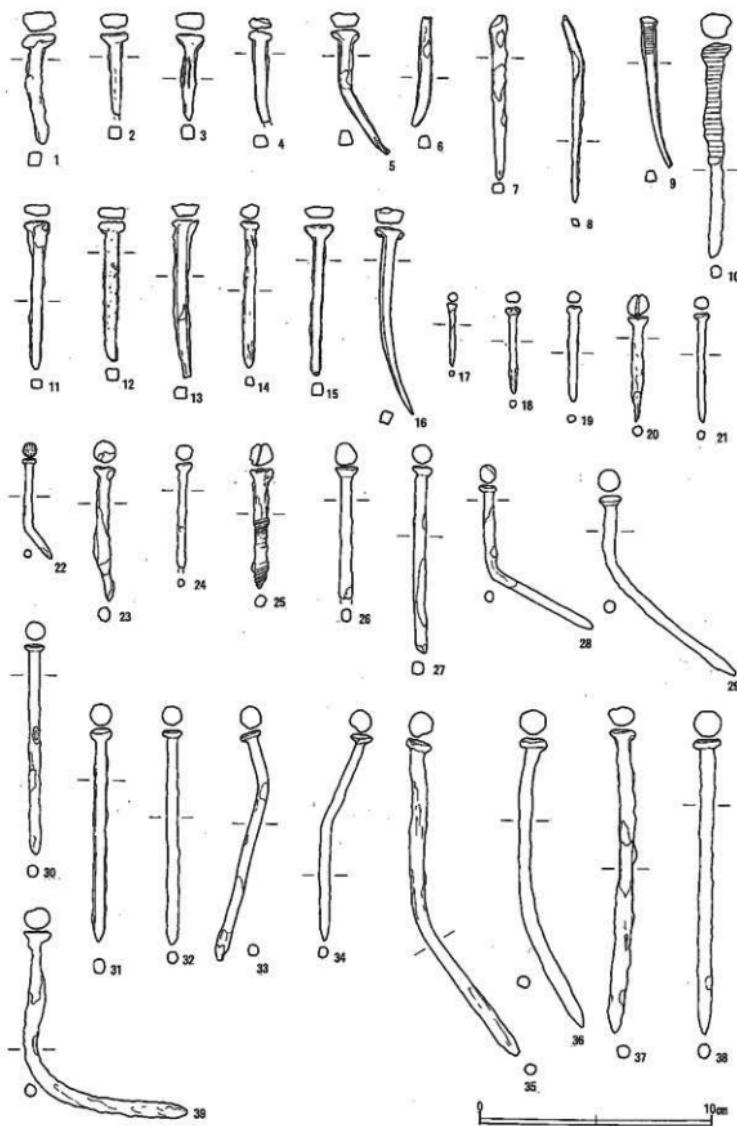


図15 鉄製品(釘)実測図 (1:2)

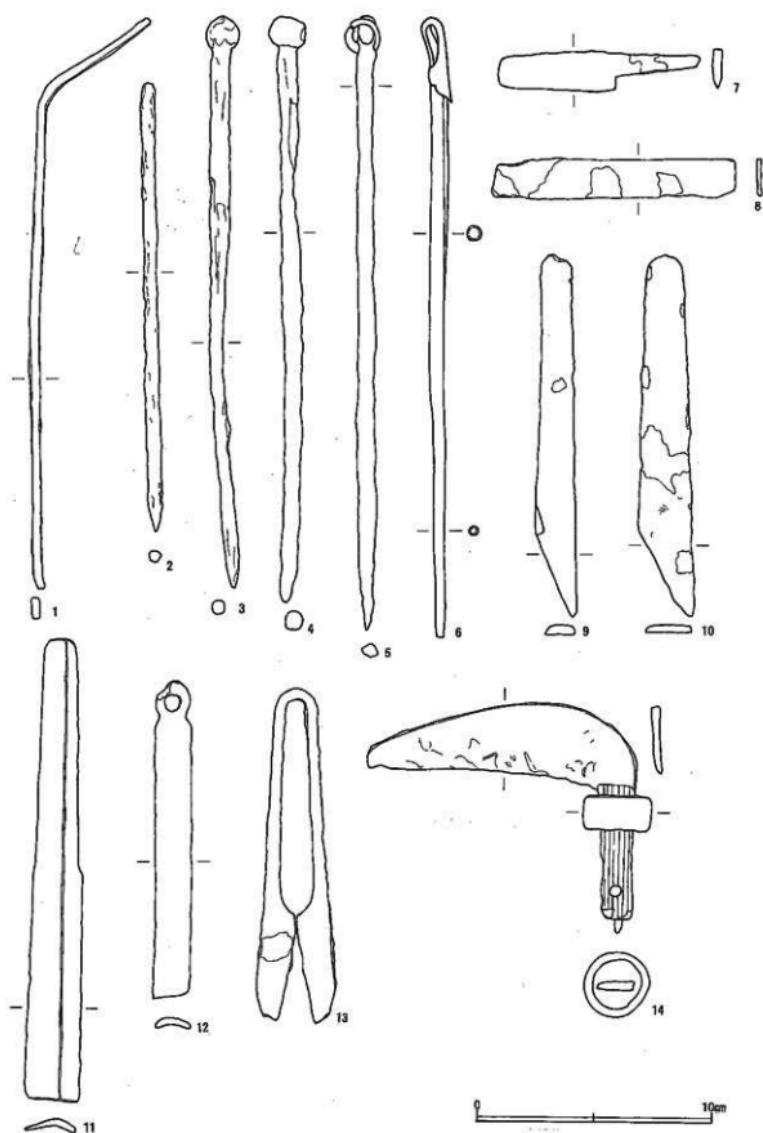


図 16 鉄製品 (火箸・鉄・鎌等) (1 : 3)

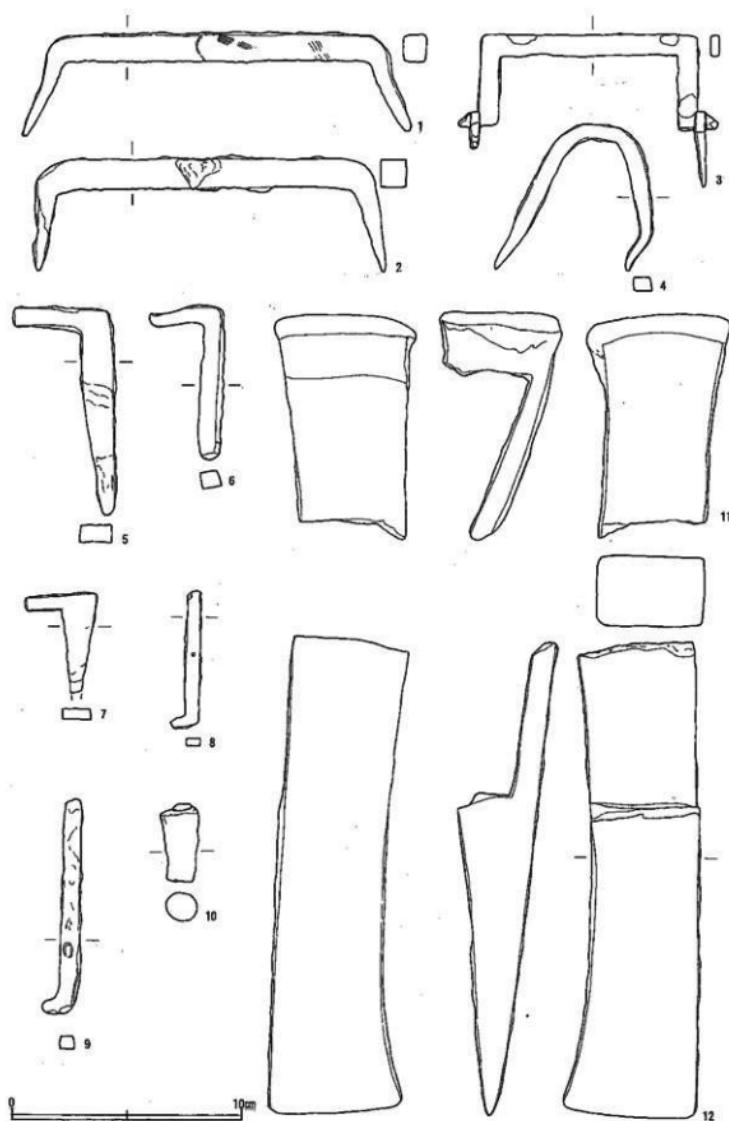


図17 鉄製品(鎧・斧等) (1:3)

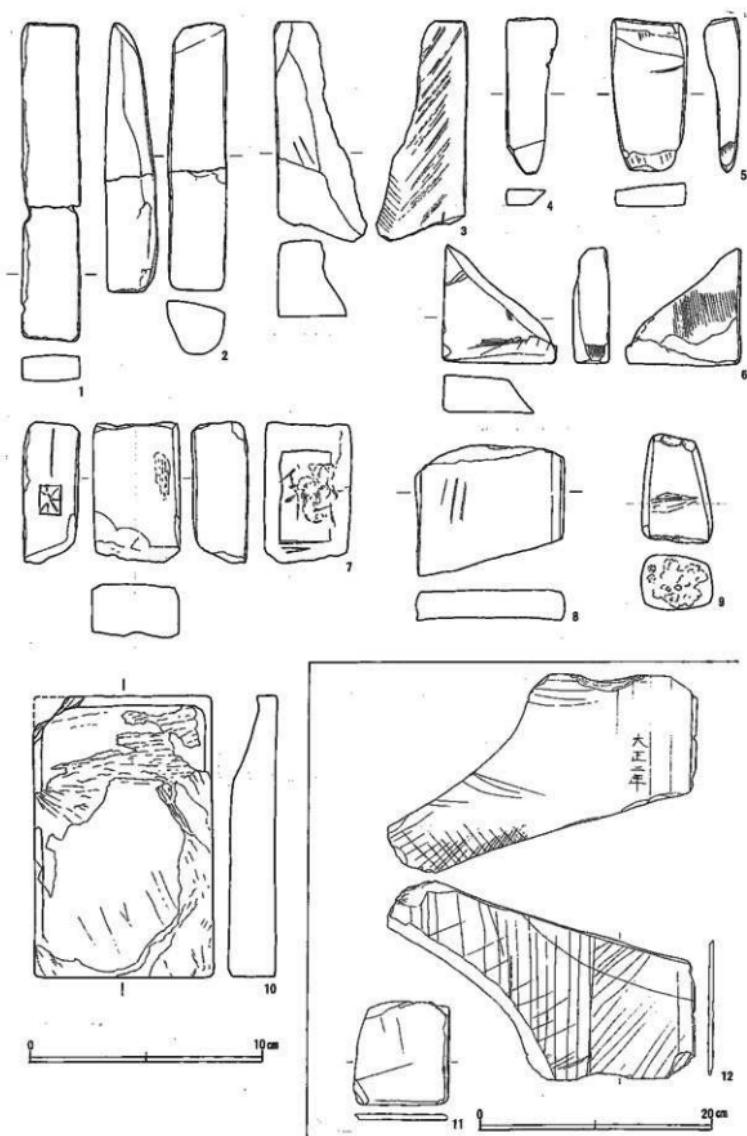


図18 石製品（砥石・硯等）(1:2 1:4)

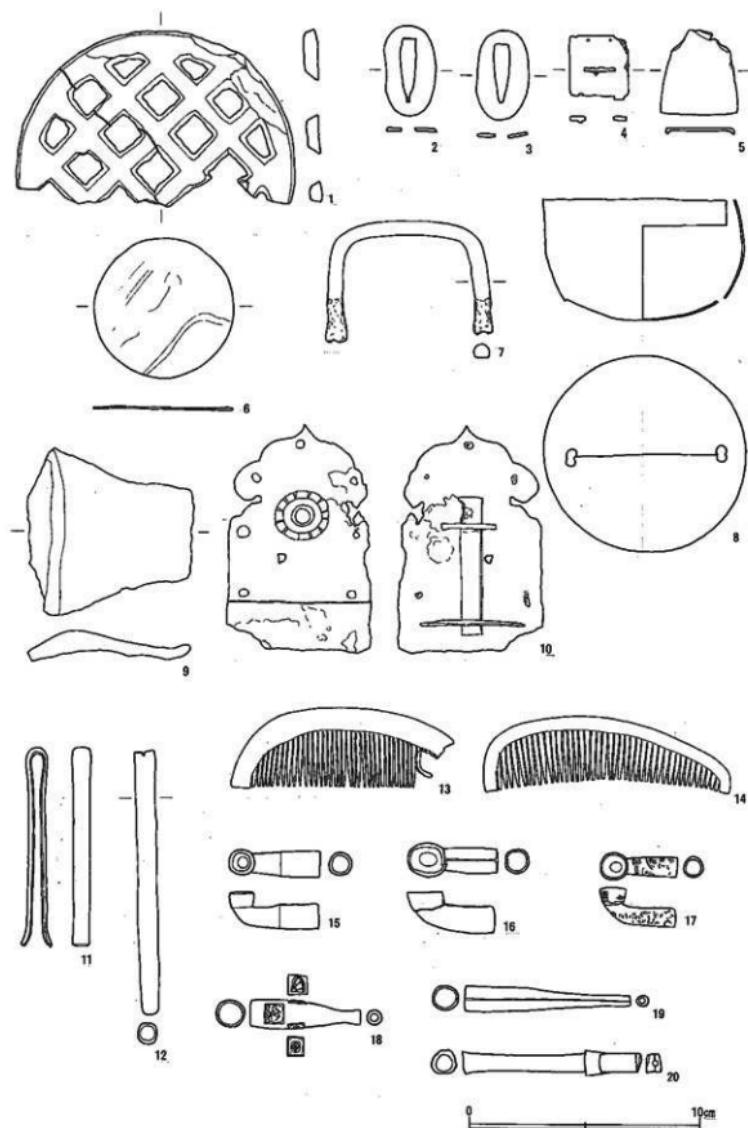


図 19 その他の遺物（鉢・鎧・飾り金具・櫛・煙管等）(1 : 2)

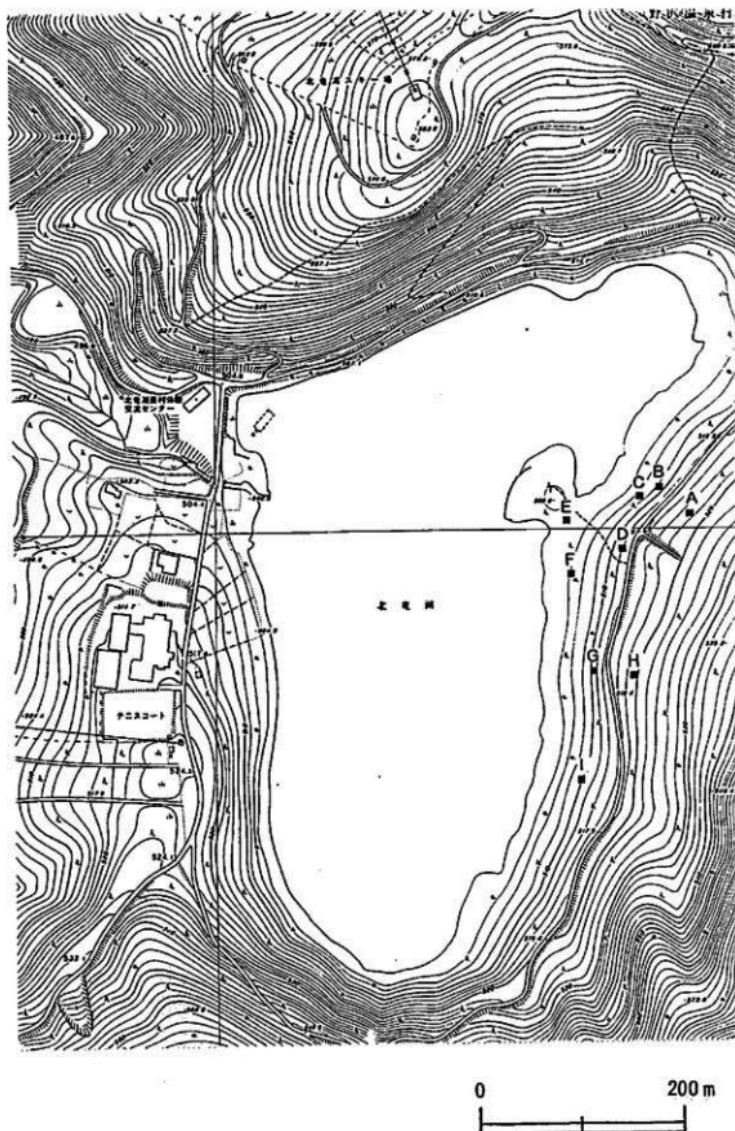


図1 大营遺跡周辺地形図及び調査区（1：5000）

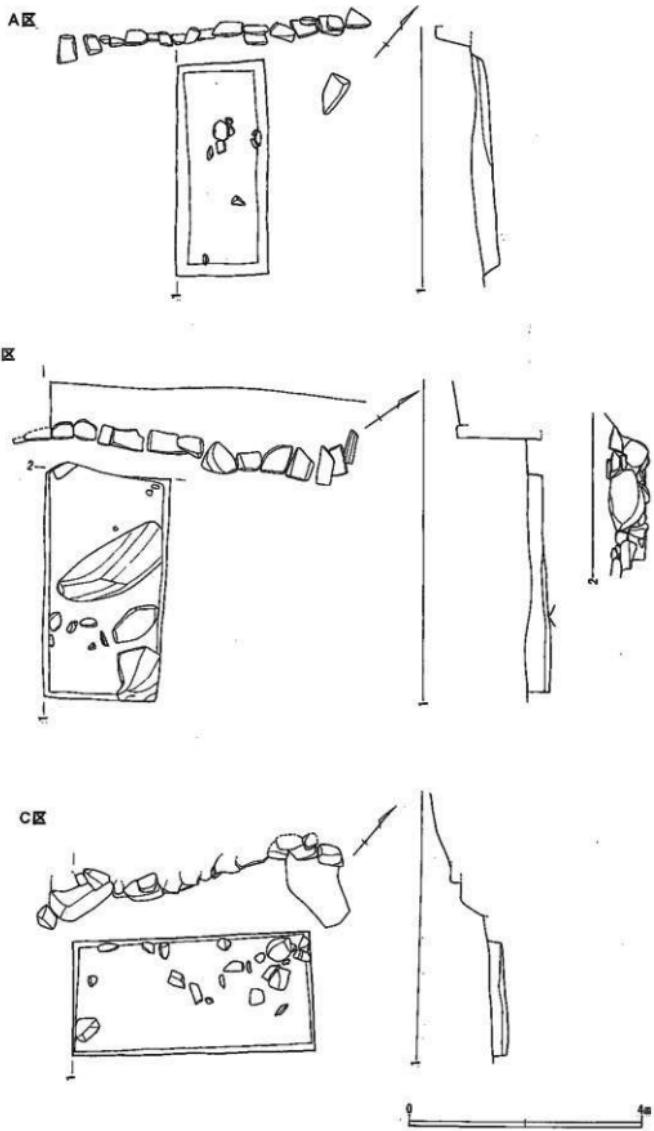


図2 各区トレンチ平面図1 (1:40)

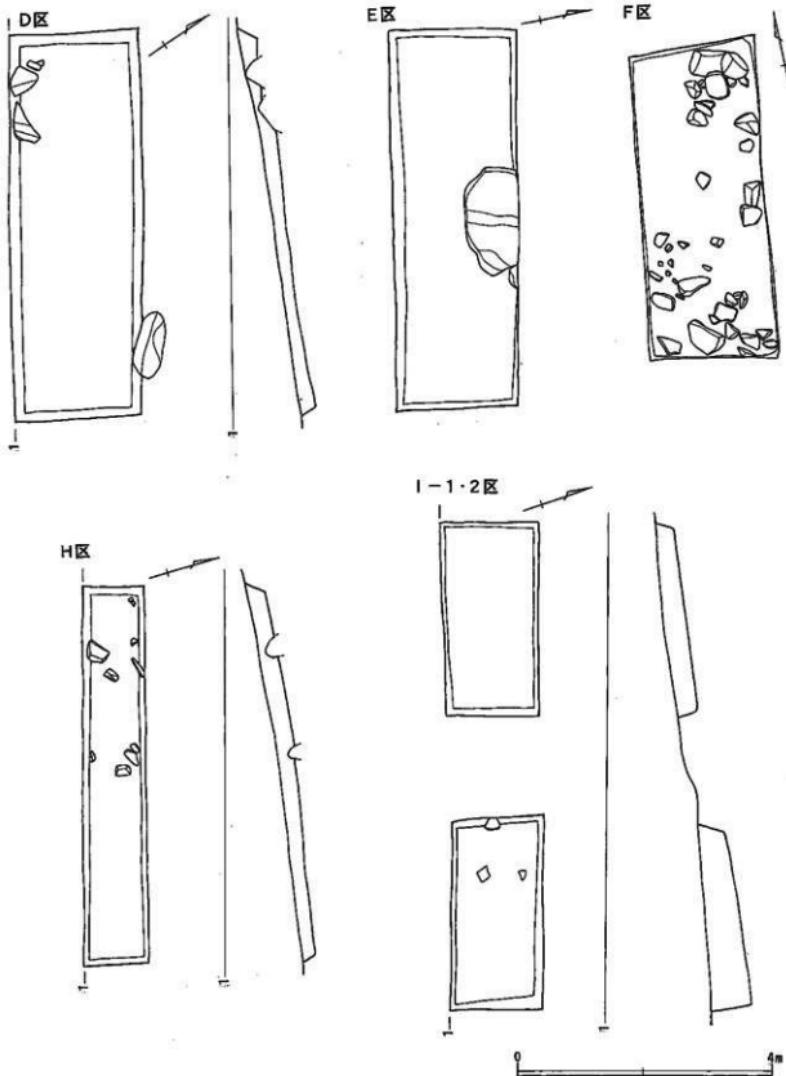


図3 各区トレンチ平面図2 (1 : 40)

報告書抄録

ふりがな	しない いせき							
書名	市内遺跡							
副書名	一千刈遺跡・小菅大型院跡・大菅遺跡							
巻次								
シリーズ名	飯山市埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第69集							
編著者名	望月静雄							
編集機関	飯山市教育委員会							
所在地	〒389-2292 長野県飯山市飯山1110-1 Tel.0269(62)3111 内線366							
発行年月日	平成15年3月20日							
ふりがな 所有遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° °'	東經 ° °'	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
千刈遺跡	長野県飯山市大字瑞穂6523番地	20213	67	36° 52' 49"	138° 24' 39"	20030418 ~ 20030603	207.5 m ²	個人住宅建設に伴う調査
小菅大型院跡	大字瑞穂7053番地ほか		318	36° 53' 28"	138° 25' 52"	20030826 ~ 20030924	687.5 m ²	遺構確認調査
大菅遺跡	大字瑞穂7400番地ほか		319	36° 54' 06"	138° 25' 48"	20031008 ~ 20031016	153.77 m ²	開発対応のための遺跡確認調査
所有遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
千刈遺跡	集落址	旧石器・平安時代	竪穴状遺構・土坑	旧石器・土師器・須恵器・灰釉陶器				
小菅大型院跡	寺院跡	中・近世・近代~	寺院礎石	陶磁器				
大菅	包蔵地	平安・中世	なし	土師器				

飯山市埋蔵文化財調査報告 第69集

市内遺跡—千苅遺跡・小菅大聖院跡・大菅遺跡—

発行者 長野県飯山市大字飯山 1110-1

飯山市教育委員会

Tel 0269-62-3111

発行日 平成15年3月20日

編集者 飯山市教育委員会

印刷所 カシヨ株式会社